WASEDA bungaku FreePaper
vol.013_2008_summer
愉しい文学
Wonderful BUNGAKU

鹿島田真希／nanakikae／福永信＋名久井直子／大杉重男／上野昂志／海猫沢めろん／中森明夫／池田雄一／南陀楼綾繁＋内澤旬子／生田武志／村田沙耶香→岡本かの子／斎藤美奈子／山本動物／大久秀憲／四方田犬彦／長嶋有／柴崎友香／中村航／山崎ナオコーラ／戸塚伎一／向井豊昭

¥0

もう出ていこう

鹿島田真希

あそこに住んでいるとろくなことがない。私は突然そう思ったのだ。

昨年まで、私は某教会の司祭館というところに住んでいた。教会職員の共同住宅だ。わかりやすくいえば、社宅のようなものだろう。同じ敷地内に神学生から、社長にあたる府主教座下まで住んでいるのだ。私の夫は、教会で、輔祭という位の職員をやっており、私たちはそこに結婚して移り住んでいたのだ。その期間はたった三年という短い期間だった。

同じ敷地内にそれだけの人が住んでいれば、当然いさかいや足の引っ張り合いがある。誰かが主教座下と食事に行けば、すぐ噂になり、妬まれる。また、ゴミ箱をあさる職員などもいて、変わったもの、例えば宅配ピザの紙容器などがあれば、聖職者の妻の怠慢として、たちまち言いふらされる。

その話だけでも充分小説になりそうなのだが、それはまた別の機会にしておく。私が今、言いたいのは、いささか狂気じみた、グロテスクな人間についてなのだ。

ある夏の夜、私と夫が、教会の前を散歩していると、大変酔っ払ったT神学生に出会った。そして「俺の言葉には嘘がある」などとぶつぶつ言い始めた。

彼は言った。

「輔祭さん、俺が奥さんに向って、俺のもの、デカイよ、太いよ、などと言えますか？　でも言えないんですよ。ここが教会だからです」

とにかく言っていることが支離滅裂だった。なにを言っているのかわからなかったが、酔っ払っているせいだろう、ということになった。話が長くなりそうだったので、三人でロイヤルホストへ行くことになった。

私はそのころ、建築を題材にした小説を書こうとして、彼に意見を求めていた。ギリシャ建造物に魅せられて、狂人になった人物を描きたかったのだ。彼はギリシャで建築を学んだ、日本で唯一の人間であるとして、教会内で非常にちやほやされていた。

私はそのことを、昨年の府主教座下主宰のクリスマスパーティーで知った。

彼は私をマクリナさん、と洗礼名で呼んだ。

「マクリナさん、俺、本当は建築をやりたいんですよ。アテネ大学で建築を学んでいたんです」

「そうですか。すごいですね」

すごさがわかるほど、建築のことは知らなかったが、とりあえず誉めた。

私は、建築のどういう分野をやりたいのですか、と質問した。

「古い建造物をパソコンでアップデートする仕事がやりたいんです」

「それではなぜ、神学校に入ったのですか？」

「本当は大学院へ行きたかったのですが、妻がいて、食べていかなければならないので、大学院により近い神学校へ入ることになったのです」

「そうですかあ」

私は感心して聞いていた。ギリシャの日光で浅黒く日焼けした彼はとても好青年に見えた。

私は自分が建築の小説を書きたい、ということを言った。そして、そのために建築について色々と話を聞きたい、と言った。しかし彼はそのことについては気が進まないようだった。

結果的に建築をやっている別の友人に、参考意見を求めることになった。

ところが、ある神父のマトシカ、つまり奥さんが、T神学生は、テサロニケ大学を出たはずだ、と言った。彼はある時は、アテネ大学、ある時は、テサロニケ大学を出たと言っていたらしい。

また、友人に聞いたところ、パソコンで建造物をアップデートする仕事は、建築家が片手間にやるもので、それを専門的にやる人はいないらしく、それを専門としてやるということは、建築家として自分が一流でないと認めたことになる、と言った。

深夜のロイヤルホストで、まず建築の話になった。酔っ払ったT神学生は、私のことをマクリナと、呼び捨てにした。

「マクリナ、お前が建築家の狂気について気づいたのは、いいセンスだと思う」

下を向いて頷いたフリをする。

「だけど、お前みたいなぽっと出の作家に書いてほしくないんだよ」

ぽっと出と言われることは慣れていたので、かちんともこなかった。しかし、マトシカや友人から聞いた話を知っていたので、反応に困った。

「お前、賞とったらしいな。おごるなよ。俺は、お前が書いた本読んだんだよ」

それは、私が賞を取った、長崎の原爆が題材となっている作品のようだった。

「あの小説、私小説だって書いてあっただろ？　お前は、誰かわからないように書いているつもりかもしれないけど、読んでれば、誰かわかるんだよ、アトピー性皮膚炎なんて書いたらさあ」

アトピー性皮膚炎なのは夫だが、彼をモデルにしたわけではなかった。そもそも、その作品は私小説ではないし、本の中にも私小説であるとは書いていなかった。

それから長々と説教されたが、覚えていない。私は別のことを考えていた。このT神学生に私は妙な既視感を覚えていた。

私の記憶は中学生の頃まで遡った。私の中学校は女子校だった。一人、目立つ少女がいた。ショートカットの少女で、自分のことを「俺」と言い、男言葉を使うのだ。今でも彼女の「ちげーよ」という言葉が耳に残っている。

彼女の名前は、ノリコと言ったが、彼女は自分のことを保、たもっちゃんと呼ばせていた。どうやら同人誌のペンネームらしい。同人誌で男っぽい名前を自分につける女の子はたくさんいた。良、とか克己、とか。ノリコもそうだったのだろう。

ノリコは男言葉を使い、自身のことをたもっちゃんと呼ばせ、男子になりきっていた。こういう現象は女子校にはよくあることだった。実際、少年っぽい少女は人気があった。運動会になると、学ランを着た応援団が登場して、よく写真を撮られていた。

ノリコの人気は写真を撮られるほどではなかったが、まあまあだった。彼女のグループは私を含めて六人ほどいたが、彼女はその中でもリーダー格というわけではなかった。

美術の時間、私たちは絵画をそっちのけで話をしていた。丁度その頃、加勢大周がデビューして、映画に出たばかりだった。また、それにならんで吉田栄作も人気があった。

その時、加勢大周と吉田栄作のどちらが、格好いいか、という話になった。吉田栄作のほうが、人気があった。その時、一人の少女が、加勢大周のほうが好きだといった。

その瞬間、ノリコが絵の具の筆の手を止めて言ったのだ。

「大周？　あいつ優しいよ」

一同は黙り込んだ。大周、と呼び捨てにした、そしてあいつ、と言った、とみんな心の中で思ったに違いない。しかしノリコになぜ、大周、と呼び捨てにするのか、とは問わなかった。ノリコは親戚に芸能関係の仕事をしている人がいるようだった。そんな彼女が、加勢大周を大周と、そして、あいつ、と言ったのなら、ノリコは加勢大周に会ったことがあるに違いない、そして、彼にノリコ本人が優しくしてもらったに違いない、という期待を持たせた。

しかし、期待を確かめることなく、話は途切れた。絵の具の青がない、と言う少女が出てきたのだ。

「青？　俺作れるよ」

ノリコが言った。

ノリコは緑と赤と黄色で青の絵の具が作れるというのだ。

ノリコはその三つの絵の具を混ぜた。そして、そこから、オレンジ色の絵の具を貸してほしいと言った。

「これで、黄色が抜けただろ？」

とノリコは言った。私たちはわからないまま、うん、と頷いた。そして次に私たちはノリコに白を渡した。

「これで、赤が抜けたんだよ」

と彼女は言った。またみんなよくわからないまま、頷いた。

ノリコはそう言って、次々に色を混ぜていった。しかし青ができあがる前に、美術の時間が終わってしまった。

ノリコのアドレス帳を見たことがある。有名な同人作家の住所が書いてあった。私は、すごいね、とノリコに言った。こんなに有名な人と友達なんて。ノリコはなにも言わずにこにことしていた。

しかし今になってよく考えてみると、同人作家の住所というのは、意外と簡単にわかるものだ。当時の同人誌では、通信販売というものをやっていた。そのために、雑誌の巻末に私書箱の住所を記載するのだ。ノリコがアドレス帳に書いていたのは、その私書箱の住所だと思われる。

ともかく、同人作家の友達であると謳うのは簡単なことだ。会場に行けば作家本人が同人誌を売っているのだから、話もできるし、ファンレターを送れば意外と簡単に返事ももらえる。

しかしノリコは、そのアドレス帳に満足しているらしかった。その他にも、声優に年賀状を出したら、返事がもらえたらしく、その返事とやらを見せてくれた。ノリコは有名人と少しでもつながっていることが、喜びであるらしかった。

今、考えてみると、有名人とつながっている、ということが、

そんなはったりとして使えるほど、皆、重要に思っていたのだろうかということが疑問だ。私たち以上に、ノリコが有名人とつながっていたかったのではないだろうか。

その後しばらく、ノリコは有名人のサインをもらってくる、と何人もの人間と約束したが、サインをもらってきた試しがなかった。

しかし、ノリコのはったりは有名人だけではなかった。ノリコの矛先は、人気教師にまで及んだ。

美術の教師は人気があった。若い男性だったので、女子校の生徒にとっては、初めて異性として意識する存在だったのだ。たいしていい男でもなかったが、真田広之に似ていた。生徒の中には恋愛感情をもっている者もいた。また、その教師は、ホモセクシュアルであるという噂もあり、とにかく、生徒にとっては、関心の離れない教師だった。

私の通っている学校は、私立で、中高一貫制の学校だった。高校にあがる前に、芸術科目を選択しなければならなかった。芸術科目は、工芸、美術、書道、音楽と分かれていた。

ノリコは美術の成績が良く、また書道もうまかった。だから、ノリコはその美術の人気教師にどちらの進路にすべきか相談したのだと言っていた。

「そうしたらさあ、あいつが、いーんだよ、お前は美術に行けばよー、なんて言いやがってさあ」

また、ノリコのあいつ呼ばわりが始まった、と思った。そしてまた、ノリコの話し方を聞いていると、人気教師が、強力に美術へ進むように言っているようにも聞こえる。人気教師は、確かに、ノリコに美術へ進むように言ったのかもしれない。しかし、「いーんだよ、お前は美術に行けばよー」と言ったかどうかはわからない。

私は、美術の時間、ノリコの近くの席に座っていた。人気教師が、ノリコに指導しているのを見たことがある。とてもそんなになれなれしい間柄ではなかったように思える。

しかしノリコの言っていることは、嘘だとも言い切れなかった。芸能関係の親戚がいることも本当のようだったし、なにしろ、私たちが、ノリコの言い方から勝手に推測して、ノリコは有名人を、そして人気教師をあいつ呼ばわりするのだから、友達なのだ、親しいのだ、と思っているだけなのだから。ノリコは嘘すれすれのはったりをかまして、私たちの尊敬を集めていた。

だけど、例えばいつ誰が見るかもわからないアドレス帳に、有名人の住所を書いていることがはったりと言えるだろうか。他人のアドレス帳など、見ないことの方が多いはずだ。ノリコは心の中で、自分は本当に有名人や人気教師と親しいのだ、と思っていたのではないだろうか。そうでなければこうも繰り返し嘘とばれるはったりをかますだろうか。

私はそんなノリコのはったりについて考えながら、夜のロイヤルホストにいた。すると突然、T神学生が言った。

「輔祭さん、俺たち神学生がどれだけあなたのことを愛しているかわかっていますか？」

輔祭である夫は少しためらっていた。

T神学生は続けた。

「輔祭さん、俺、本当にあなたの役に立ちたいと思っているんですよ。本気ですよ。関西でシャコタン乗り回している奴が、本気で人のためになりたいと思っているんですよ？」

T神学生はほとんど泣かんばかりの様子だった。

彼は以前、自分のことを埼玉県出身だと言っていた。シャコタンを乗り回したいというのは、彼の夢で、実際やっていたのはピンポンダッシュであることも、彼の奥さんから聞いていた。

しかし彼は本気だった。自分は本当に関西人であり、過去にシャコタンを乗り回していた、そう思っているかのようだった。そして、関西でシャコタンを乗り回している自分が、誰かの役に立とうとしている、そのことに、誰よりも自分自身が感動しているようだった。彼は、まるで、自分の嘘に自ら騙されているようだった。

やがて、そんな不思議な夜が終わり、時が経った。夫が病にかかり、数ヶ月働けなくなると、T神学生は、夫に見向きもしなくなった。夫におもねってもメリットがないと思ったのだろう。

彼の手のひらの返し方は大層、露骨だった。夫は祈祷の時に、突き飛ばされたことが何度もあったという。私たちには理解しがたいことだった。突き飛ばすということがではない。人に涙ながらに語ったり、逆に突き飛ばしたり、そこまで人間関係を渡り歩いて、教会的ヒエラルキーの上に立ちたいという気持ちが理解できなかったのだ。しかし実際、教会にいて、大して偉くなりたいと思わない私たちのほうが、少数派であるらしい。

夫の病は首をこっくり、こっくり、させるという症状だった。周りの人間はそれを夫の寝不足のせいだと言った。T神学生が、そう言いふらしていたのだ。また、嘘か、と思った。そのため夫と仲のよかった信者も彼から離れていくようになった。こうして私たちは四面楚歌の状態になってしまったのだ。

やがてT神学生の卒業の日がやってきた。彼の卒論はどういうものかはわからないが、ギリシャ語原典をあたった力作で、規定枚数の五十枚をはるかに超えた。百枚であったらしい。私は、ああなるほど、彼はそういうアカデミックなことがやりたかったのか、といまさらながらに気づいた。そして、その夢をまだ諦めていないことに驚いた。

T神学生はまもなく叙聖されて、T神父となった。夫の輔祭という位を追い越した、というわけだ。

ある日、私がスーパーのビニール袋を下げて境内を歩いていると、主教座下に出会った。主教座下は言った。

「お前、料理作ってるのか？」

「そうですけど、どうしてですか」

「T神父が外食ばかりしているって言ってたぞ」

私は驚いた。しかしその頃はT神父の中傷には慣れていたので、すぐ落ち着きを取り戻した。

主教座下は続けた。

「お前、また新しい本出したなあ。建築の話なんだろ？」

「ええそうです。なんで御存知なんですか」

「T神父が自分のところに訊きに来たって言ってたぞ」

「そうなんです。でも結局訊く機会がなくて」

「そうなのか。あいつ、自分が貸したコルビュジエの資料を元に書いたって言ってすごく怒ってたぞ」

私はしばらく黙り、「話も聞いていないし、資料も借りていません」と言った。

すると主教座下が呟いた。

「妄想だな」

「ですね」

私は主教座下と別れ、自分の部屋に戻ると、休んでいる夫に言った。

「もう出ていこう」

こんなところにいたら、ろくなことがない。後ろめたさはあるが、引っ越しの準備をした。

荷物を整理していたら、中学生の時の卒業アルバムが出てきた。

〈了〉

鹿島田真希◉Kashimada Maki

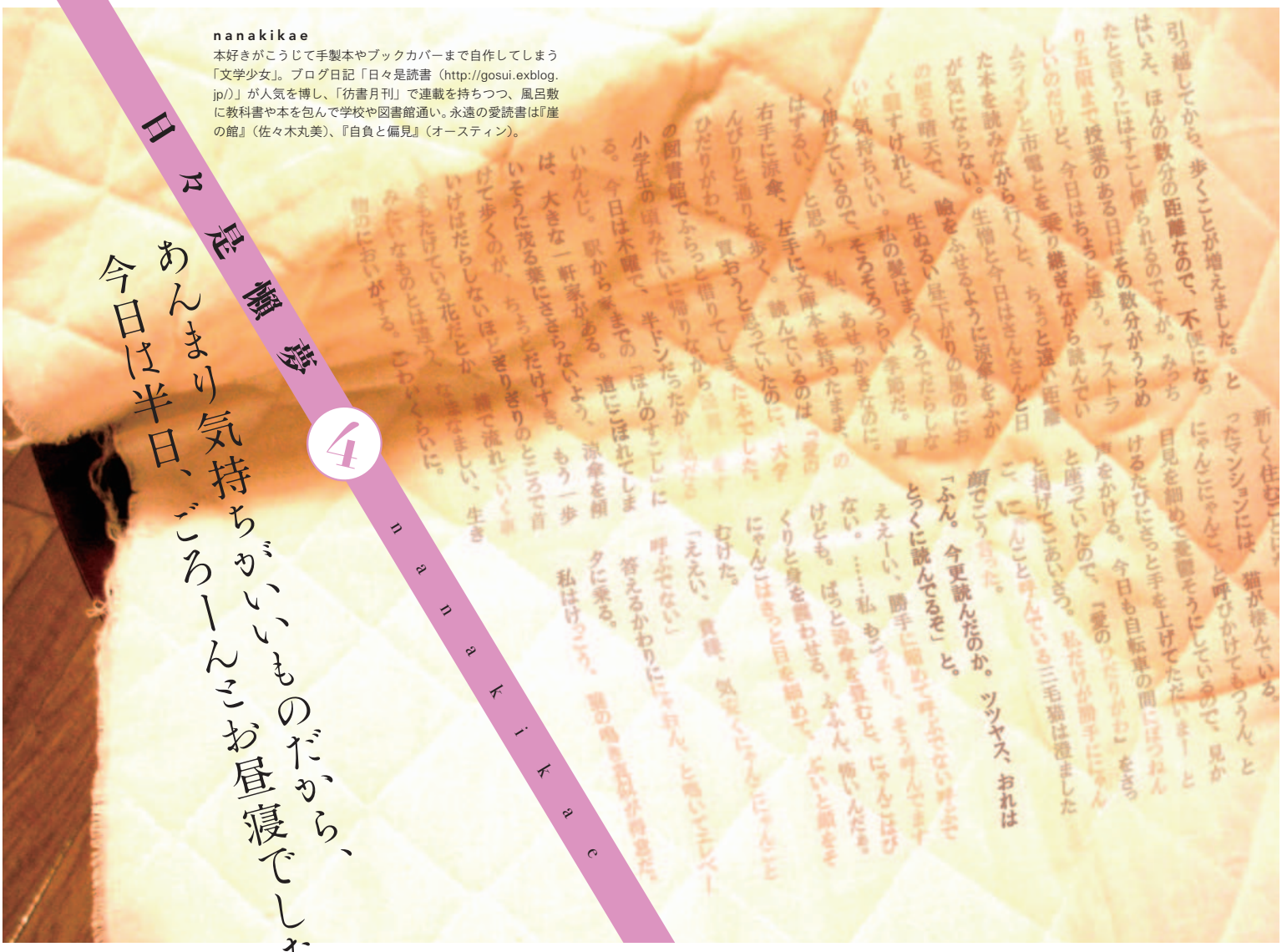
76年生。ギャグマンガ「稲中」を想起されると絶賛された「二匹」でデビュー、デュラスを思わせる「白バラ四姉妹殺人事件」で一躍脚光を浴び、ドストエフスキーをほうふつとさせる「六〇〇度の愛」で三島由紀夫賞を受賞。さらには野間文芸新人賞の「ピカルディーの三度」ではBL的世界観すら導入した、変幻自在・天衣無縫の「女小説家」。「ゼロの王国」を「群像」誌で連載するほか、08年は月産150枚ペースで疾走中。

photographers' gallery（pg）

東京・新宿にある、写真家たちの自主運営ギャラリー。単なる写真ギャラリーにとどまらず、レクチャーやシンポジウム、写真集の編集・発行、エッセイや批評の発信、移動展など、「pg」という集団（ギルド）それ自体が「メディア＝媒体」となる活動を続けている。第2期「WB」では、pgのメンバーの作品が交代で、小誌制表紙を飾ります。http://www.pg-web.net/

大字直紀 ◉ OHJI Naoki

77年東京生。2001年、photographers' galleryを設立／参加。個展「XXXX STREET SNAPSHOTS」（Vol.1-12、連続展として毎月開催）、「Cult of Personality」（2007～）など。グループ展「ICANOF MEDIA ART SHOW 2006 TELOMERIC展」（八戸市美術館青森）など。写真集に『TELOMERIC』（photographers' gallery、2006）。



日々是読書 4

nanakikae

あんまり気持ちがいいものだから、
今日は半日、ごろーんこお昼寝でした。

nanakikae
本好きがこうじて手製本やブックカバーまで自作してしまう「文学少女」。ブログ日記「日々是読書（http://gosui.exblog.jp/）」が人気を博し、「彷書月刊」で連載を持ちつつ、風呂敷に教科書や本を包んで学校や図書館通い。永遠の愛読書は『崖の館』（佐々木丸美）、『自負と偏見』（オースティン）。

［連載］三か所

ものしり

福永信

illustrated by 名久井直子

なんでも聞いてとAがいう。これに対して本当になんでも聞いてしまうとえらいめにあう。それを父親はよく理解している。しばらく思案しているふうをよそおってからおもむろに新聞の一面をかざっていた事件今朝朝食を食べながら見てたテレビでもやっていたあの事件について見解を聞かせてもらえまいかとやや芝居がかった口調で問う。するとAはちょっと待っててといって電話を切る。とんとんと音がする。階段をのぼっているのだ。少しむずかしかったかもしれないと父親は思う。けれど簡単すぎても非難されるのだから大変だと愛車に水をかける。小さな虹が浮かび上がる。片づけを終えてサンダルをぬいだ。親指がぬれている。便所で用をたしているときにまた電話が鳴る。Aが漢字をとばしながら記事を読んでいるのだと気づくまでにしばらくかかった。二階の書斎で父親は自分の若さを思い知った。もっと別のことを聞くべきだったのだ。ひとつひとつ破片をつまんでいると胸ポケットの電話がみたび鳴る。今日の天気は晴れか雨かとAが聞く。父はぶぜんとした表情で晴れだろうがと答える。テレビでもそういってたじゃないか。それよりお前といったところで電話は切れた。廊下へ出るとAが顔を半分だして階段からこちらを見ていた。さっきと髪型が変わっているがなんでだろうか。すぐに頭をひっこめる。父親は後を追う。サンダルをはいて外へ出る。外はもちろん晴れだ。小さな虹が目の前に浮かんですぐに消えた。

身長は一二四センチ。体重は三五キロ。少し巻き毛でたまに寝癖のためにそれがもっと強調される。色は黒だとずっと思っていたけれどほんとはちょっと茶色。どうしてわかったかというと席替えで窓際になったから。言葉にはときどき方言がまじる。みんな笑うけどそれがかっこいいのだ。家はBの住むところより高台にある団地。長い長い長い坂道。ある日ものすごいスピードで自転車が過ぎ去っていった。お母さんと手をつないで出てきたところを見たこともある。Bに気づくとパッと手をはなした。目がお母さんにそっくり。夜にすれちがったのは夏休みのまんなかあたり。花火の帰り。ちょうどBは田舎から帰ってきたばかりでまっくろけ。三日に一度はしましまの靴下をはいてくる。一人で缶ジュースを飲んでいるのを見たこともある。Bも真似して飲んでみたことがある。腕時計をはめていた。小さな妹か弟がいる。坂の下のドラッグストアでおむつを買っていたのを目撃したことがあるのだ。そのときBはお母さんと一緒に来ていた。どういうわけか顔が赤くなるのがBは自分でわかった。

同世代の者のなかでCは比較的経験豊富であるといえる。それは本人も自覚しているところだった。Cには夏休みが六回訪れた。そのすべてで川遊びをしていつも真っ黒に日焼けするのがCの自慢だった。かならず深いところまでもぐった。これも自慢だった。なにしろCの友人たちのなかには顔をつけることさえできないと公言する者も少なくなかったからである。中にはお風呂で髪を洗うのも一人でできないと述べる者もありCはますます自信をふかめたのだった。日常生活においても多くの経験をした。これは自ら求めたことではないのだがひとところに定住するのではなく気候の異なる地域を点点とした。小学校にあがってからだけでも四回も越した。だからさまざまな文化に触れることができたしいくつもの方言をCは使い分けることができた。手紙の交換も途切れることがなかった。たくさんのプレゼントももらいそれは枕元にかざってある。ベッドの上で手紙を読みながらいつも思うのは自分が転校せずにその学校に残っていたら今頃どうしてるだろうということだった。ときに想像は現在を追い抜き中学になり高校になって成人を迎えるところまで進むのだった。消灯の時間がCにとって一日の終わりではなかった。たくさんのCがそこにいた。たくさんのCはねむるということがいつまでもなかった。

何か聞いてくれれば答える用意がDにはある。だが問いかけはといえばもっぱらおんなじことのくりかえし。おしりを見せることにもすっかり慣れてしまったほどだ。むろんおなかがすいたのかとかおしっこしたのかとかいった問いがまちがっていると主張したいのではない。そうではなくもっとほかに聞くべきことがあろうにとDは思うのである。ときに率直にあなたはどこから来たのと問われることもあるが本当にそれは稀なこと。Dは手足を使って雄弁に語るが一日や二日で済むほどことは単純ではない。だがその若い二人はといえばもう次の日には自分らの問いかけをあっさり手放しおなかがすいたのとかおしっこしたのとかそういった問いにすりかえてしまう。Dは無念のあまり夜となく昼となく泣きじゃくったものだ。とはいえじつはDも人のことをいえた立場にはなかった。そう遠くないうちにおしっことかまんまとか答えるようになるからだ。

「青」の幻滅 ハイブリッド・クリティック⑭

大杉重男

私は夏目漱石が万年筆で書くことに抵抗を感じていたことを『アンチ漱石』の中で分析したことがある。漱石の随筆「余と万年筆」（一九一二年六月三〇日）によれば、漱石は万年筆を「三四年前」から使い始めるが気に入らず、修善寺の大患後の第一作『彼岸過迄』を書くときに「唯のペン」（つけペン）に逆戻りした。漱石が悪戦苦闘したのは、当時の万年筆の性能に問題があったことが主な理由であると書かれているが、それだけとは思われない。

蓮實重彦の『「赤」の誘惑』を読むと、その直感が荒唐無稽な形で傍証される感覚に襲われる。蓮實はそこにおいて日本と西欧の近現代のテクストの至る所に出現する「赤」の表象をその意味を宙吊りにしたままひたすら列挙しているのだが、漱石も「赤」に誘惑されて「フィクション」としての小説を書いた一人として登場する。そこに挙げられるのは『それから』の末尾の有名な「仕舞には世の中が真赤になった」場面であるが、この指摘を踏まえると、かつて私が論じた漱石の万年筆への抵抗は別の視点から読むことができる。すなわち「余と万年筆」によれば、漱石は「セピヤ色の墨」を好み、「ブリュー・ブラック」を嫌っていた。しかし万年筆のインクは「ブリュー・ブラック」が基本であったので、漱石は「わざわざセピヤ色の墨を買つて来て、遠慮なくペリカンの口を割つて飲まし」たが、イカ墨インクと見られるその墨は、おそらく粒子が粗いために万年筆を詰まらせるトラブルを引き起こした。

「セピヤ色」＝茶褐色の墨を好み「ブリュー・ブラック」のインクを嫌う漱石の振舞いは、確かにいかにも蓮實的な「赤」の作家にふさわしいものと言える。しかし問題は、漱石が結局最終的に「セピヤ色」を捨てて「ブリュー・ブラック」を受け入れたように見えることである。すなわち漱石は『彼岸過迄』を「唯のペン」で書き始めた時「余の好むセピヤ色の墨で自由に原稿紙を彩どる」ことができると、最後まで「唯のペン」で通すつもりだったが、内田魯庵の勧めでより書きやすいオノト社製の万年筆に乗り換えた。これは漱石が書くことの利便性と引き換えに「赤」の誘惑を放棄し、「ブリュー・ブラック」＝「青」の幻滅を受け入れたと解釈できるのではないか。実際『彼岸過迄』が前半の軽快な漫談調を喪失し、深刻な自意識と内面の劇に転化して行くのは、それを綴る文字が物質的に「赤」から「青」へ転化して行くことと無関係ではないのかもしれない。『それから』もそもそもは「赤色」を拒否し「青色」に染まり続けようとする代助が、「赤色」の中に投げ捨てられる物語だったのであり、漱石は「青」と「赤」の間で不断に揺れ続けている。

「赤」の表象と対立する「青」の表象の系譜学を構想できるだろうか。たとえば蓮實はコナン・ドイルのシャーロック・ホームズ物第一作『緋色の研究』（A Study in Scarlet）を「赤」の物語として挙げているのだが、その直後にオスカー・ワイルドがウェインライトという十九世紀の文学者兼犯罪者の伝記『ペン、鉛筆（ペンシル）と毒薬（ポイズン）　緑の研究』を書き、そして岩野泡鳴がこの「緑の研究」（A Study in Green）の Green を「青い色」と訳して紹介していることには触れていない（「ペン、ペンシル及び毒薬」、『岩野泡鳴全集』第十巻参照）。泡鳴は「青い色は美術的である、又は芸術的な色として考へられる」と述べているが、「青」が芸術家＝犯罪者の色であるとすれば、「赤」は犯罪者を捕え

上野昂志の戯言人生 ⑦

Ueno Koushi

岡校長業務連絡

北京に行く

五月の二十四日から北京に行った。

今回は、北京の郊外で、小川紳介のレトロスペクティヴが行われるので、作品の解説やシンポジウムを行うためである。主催は、中国でインディペンデント映画の上映や製作支援などを行っている栗憲庭電影基金と、山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局。東京事務局の藤岡朝子さんによると、中国では、最近、小川紳介の『映画を穫る』（山根貞男編・筑摩書房）の翻訳が再出版されてベストセラーになったが、肝腎の作品は、ほとんど見られていない、その結果、小川の言葉だけから、彼を評価するような風潮があるので、この際ぜひ、実際の作品を見せたいというのだ。

それには、こちらも、一も二もなく賛成である。映画を見ないで、解説やら作家の言葉だけが独り歩きするなんて、本末転倒も甚だしい。だが、むろん、これには、商業ルートにのらない外国の映画を見るのには、さまざまなハードルがあるという一般的な事情に加えて、中国国内でのインディペンデント系映画の上映が難しいという現実もある……実際、この映画祭の中心メンバーである朱日坤さんは、北京でドキュメンタリー映画の上映を行うたびに、公安（警察）とのいたちごっこを繰り返しているという……。だから、小川の映画がこれまで、一般向けに上映されなかったというのも、当然といえば当然なのだ。

行きの飛行機は、出発が二時間あまりも遅れたが、搭乗手続きをするところで、丸川哲史さんがやっている「竹内好研究会」でお会いした佐藤賢さんに声をかけられたのが幸いした。彼も、目的地は同じだったからだ。佐藤さんは、「現代思想」の十月臨時増刊号「ドキュメンタリー」に、「中国ドキュメンタリー〝運動〟」という論文を寄稿している。これは、わたしの知る限り、一九八〇年代末に胎動した中国のインディペンデントのドキュメンタリー映画の展開過程を検証・概説した、おそらく日本では初めての論文だと思うが、運動という言葉を括弧で括っているところに、見逃せないポイントがある。詳しくは、当該論文に当たってもらいたいが、わたしなどが、集団はもとより個人の営為においても「正」のイメージで使う「運動」という言葉に、中国の若い作家たちは、拒否反応に近い感覚で対しているというのは、彼我の差を考えるうえで大いに参考になった。

ともあれ、日本時間でいえば、夜中の十二時半を回った頃にようやく着いた北京空港には、改めて驚いた。九〇年代に何度か訪れた北京空港は、古びた建物で、昼間でも節電のため必要なところにしか灯りがついていないので、薄暗かった。それが、鉄骨とガラスで組み立てられたドームのような巨大空間に、皓々と灯りがつき、昔のＳＦにおける近未来都市のように輝いていたのだ。

だが、北京市内から外れると、車のヘッドライトが照らし出す道路の外側は闇に包まれている。そして、映画祭が行われる通州に近づくと、「昨日は通れた筈なのに」という運転手のぼやきとともに、車は、工事で遮断された道にぶつかったりもする。それは、宋庄という映画祭が行われる村でも同じだった。ここは、もともとは農村だったのだが、画家などがアトリエを作ったりするうちに、次々と画廊だの画材店ができ、芸術村と呼ばれるようになったらしい。中国では、いま、やたらに絵画が売れ、一種のバブルのようになっているという話は聞いていたが、その一例がこの村なのだろう。ただ

る芸術批判者＝探偵の色とも言え、そして二十世紀の表象としては芸術至上主義的な「青」よりは社会主義的な「赤」がふさわしいのかもしれない。しかし私はたとえば『青の時代』の著者がこのワイルドのエッセーを愛読し、中上健次が「小説家としての私は、谷崎潤一郎という物語の作家が出す毒を、徳田秋声という青く燃える冷たい火花で解かしたのかもしれない」と書いていること（『破壊せよ、とアイラーは言った』）に無感覚ではいられない。

もちろん蓮實氏に言わせれば、批評とは「眠っているすべての記号を目覚めさせる」ことを「断念」することであるのだから（第十次「早稲田文学」復刊1号）、「青」というノイズに目をつぶり「赤」の主題系だけをひたすら追うことが批評的であるのかもしれない。しかし氏は本当に何かを「断念」しているのか。他人には「断念」を強いつつ自分はただ見たいものを見ているだけではないのか。少なくとも私には、そこに立ち上がる「赤」の「フィクション」が、どこかでユートピア的抽象性をまとい、そのことにおいて奇妙に現在の「文芸復興」（？）的雰囲気と癒着しているように見えるのが気になる。東大総長として大学改革という政治に翻弄されたと思われる氏は、自身を「幽霊」であると形容しながらも、小林秀雄がマルクス主義という政治に翻弄されたプロレタリア文学者に期待した「一ぺん死んだ事のある「私」」（「私小説論」）ほども死んではいない。かつての昭和十年代の「文芸復興」が「純文学にして大衆文学」だったとすれば、現在の「文芸復興」は「純文学にしてライトノベル」であるが、そのような中で「断念」するとはどういうことなのか、私たちは「フィクション」の中の「真実」を慎重に見極めなくてはならない。

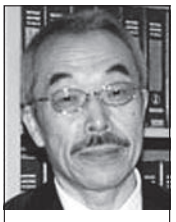
大杉重男◉Osugi Shigeo
65年生。主要著書『小説家の起源――徳田秋声論』『アンチ漱石――固有名批判』。

し、市内のそれとは違って、それらしき画廊や画廊を兼ねたレストランや画材店が並ぶのは、宋庄大門という門のある通りだけで、そこを抜けると、車もあまり通らぬだだっぴろい道路の周辺には、畑が拡がっているだけだ。

映画の上映は、そのなかにある美術館のホールと、そこから数分歩いたところに、栗憲庭電影基金がいま建設中の現象工作室の上映スペースで行われたのだが……。まず、既存のホールを借りて上映すると、公安が来て何かとうるさいので、自分たちで上映する空間を作ってしまおうというところが、大したものだ。そして、建設中といえば、まさにその通りで、上映スペースはすでに完成してはいるものの、まだ建材や塗装の匂いが残っているし、他の部分を工事している民工たちが、われわれを見て、こいつら何をやってるんだろうというような好奇の視線を投げかけてくる。

民工といえば、美術館脇の池の畔にテントを張って、そこで寝泊まりしながら、あちこちの工事をしているようだが、中学生ぐらいの年頃の少年や少女の姿も見える。小川紳介がいれば、オレの映画をやるのに、これほど似合いの場所はない、と喜ぶかも知れないが、実際はどうか。わたしにはむしろ、われわれと彼らとの隔絶のほうが強く目を打つのだ。

あの北京空港でもそうだったはずだが、建設中のビルのまわりには、地方から出てきて工事に携わる民工のテントが立ち並ぶが、工事が終わった瞬間に、それはなくなり、あとには超高層のビルが何事もなかったように、その偉容を誇っている。作るものと出来上がったモノとのこの隔絶は、果たして埋まるのか、また、埋めようとするのが正しいのか。というよりは、この隔絶そのものを梃子にする方途はないものかと、わたしの思考は空転する。



上野昂志◉Ueno Koushi
41年生。批評家。短く切れ味の良い批評で映画・写真・文学・社会を捉え続けている。主著に『戦後60年』など。http://www.amudesu.co.jp/tasogare/

集英社

『ROOKIES』『べしゃり暮らし』
森田まさのり氏（漫画家）絶賛！
「この話、僕が思いつきたかったなぁ……。」

補欠の数だけドラマがある。

ひゃくはち

早見和真
最新刊・発売中●定価1,470円（税込）

人間の煩悩は108、ボールの縫い目も108。

甲子園行きてぇ。でも、遊びてぇ。
青空。白球。大声援。そのむこうにある
煩悩いっぱい、補欠球児たちの青春。
瞠目の大型新人デビュー作！

映画化！
映画 ひゃくはち
©2008「ひゃくはち」製作委員会
8月、テアトル新宿ほか
全国ロードショー!!
http://www.108movie.jp/

福永信 ◉ Fukunaga Shin
72年生。同人誌「イルクーツク2」完売まぢか!

名久井直子 ◉ Nakui Naoko
76年生まれ。ブックデザインなど、紙まわりの仕事を手がける。福永信・長嶋有らに交じり、デザイナーとしてただひとり「メルボルン」に参加。

［連載］三か所
福永信

しるし

illustrated by 名久井直子

Aがパンをちぎっている。それを落として目印にしようというわけである。学級文庫で読んだ物語にさっそく影響されてのことだ。パンは学校から持ち帰ったものだろう。残してはならぬときびしく注意されやむを得ず隠したというわけ

それなりにまたである。家に持ち帰ればやっかいなことが生じるであろうからこうして帰宅途中に処理できるのは都合よかった。もっともはなから通学路でというつもりはなくというのは昨今誰の目がどこにあるかわかったものではないからである。すべては秘密裡に遂行されなければならないのだ。そこでAは学区の外へ出る決意をしたというわけである。ちょうど都合よく路地へ入ったところで見知らぬ男からバンに乗るように誘われた。車窓を眺めるふりをしてこまかくパンをちぎって落としていく。日が傾きかけたところで男の身辺に明らかに変化が見られ何度も電話をかけたり後ろを振り返ったり落ち着きがなくなった。ちょうどパンをすべて使い切ったときここで降りるよう命じられた。もともといつまでも助手席にいるつもりはなかったから素直に応じ西日を背に走り去るバンに手を振ったのであった。そして自分の目印をたよりに家路に着こうと振り返ったのである。

Bは当日変装して出かけるつもりだ。自分だとは絶対わからないような格好をする。そう決心したのは両親に猛反対されたからである。そのような危険な場所に保護者なく赴くことは固く禁ずるというわけである。もう約束しているし友人の両親は承諾しているのだと虚実ないまぜで必死にくらいついても首を横に振るばかり。Bはたのしみにしていたお買い物ができなくなることが何より悲しく縄跳びの練習にも身が入らず早々に切り上げたのであった。だがお風呂のなかで父親の髪をあわだてていろんなかたちにしてあそんでいたときにふと素晴らしいこの案を思いついたというわけである。さて当日はいかに。

Cがこの世に残した言葉はすべて学校の教師や塾の講師から書くように求められたものである。作文でありテスト用紙であり習字である。習字の半紙には画用紙で補強され壁に貼り出された跡がある。お手本をなぞったような文字だ。テストは空欄が多く点数も褒められたものではない。作文には遠足のことや夏休みの思い出友達のことなどが簡潔に述べられそれはいいのだが自分がどう思ったかという肝心なところはじつにあっさり流しているのだった。携帯電話のメールにも若干の言葉が保存されていたが今帰る傘忘れたそんなのばかり。多少は親の血をひいてくれたらと期待をし直接Cに伝えたこともある。やはり外国の絵本などを与えておくべきだったか。そんなことが頭をよぎったりもした。けれどもそれはまったくのあやまりであって習字の半紙にはたとえお手本どおりであったとしてもそのときのCの手の動きが刻印されている。白い答案用紙に向き合っているいつもよく見せた困った顔が目に浮かぶ。作文からはCのあの声がはっきりと聞こえてくる。

Dのかじった跡だ。歯がはえてきたのだ。成長の階段を確実にのぼっているわけで大変よろこばしいのだがこんなところをかじられては正直困る。すぐに修繕する必要がある。というのはこれもDの成長と関係があるのだけれども近く引っ越すことになっているからである。収入が増えたわけでもないしなかなかの負担なのだが来年にはDの妹の誕生が約束されているのだからやはりここでは手狭なのだ。襖を開けるとまたDのかじった跡がある。まだ青年の面影を残す父親はそっと拾いあげた。Dは彼の仕事の一部を食べてしまったのだ。破いただけかもしれぬと思って周囲をさがしてみたけれどもどこにも見つからなかった。書き直す必要がある。収入の安定が当面の目標である。落ち着け落ち着けと彼は自分に言い聞かせた。可愛いDとまだ見ぬ娘のためにおれはやるぞと椅子に腰掛けたところでまたしてもDのかじった跡を発見した。

FILE04 1997年

▼「言論界」読者投稿

言論界 読者投稿

2月10日の小学生二女児殴打からはじまった酒鬼薔薇事件は日本の犯罪史上、最も衝撃的なものとなった。事件を受けて7月には梶山官房長官が記者会見で「少年法の改正、見直し必要」と発言。法曹界をも巻き込む論争を巻き起こした。酒鬼薔薇事件以来、少年犯罪はますます増加し、凶悪なものになっていると言われる。しかし、筆者が昭和初期に遡って調査したところによると実際には少年犯罪の件数はふえてなどいないし、凶悪化しているわけでもない。メディアが発達したことによって、事件のインパクトだけが大きくなり、政治家やいい年こいた大人たちが踊らされ、クソな議論でクソな法律をつくって、凶悪な子供という幻想に苛まれている。大人たちはみな、自分が昔、子供だったことを忘れている。残酷な遊びや、冷酷な仕打ちをしたことを忘れている。大人になれば子供の頃のことはすべて忘れてしまうのだろうか。

（埼玉県・K・Yさん）

シリーズ・少年Aの系譜

海猫沢めろん

神戸市の事件を受けて子供を徹底擁護する立場の論客が現れることは想像に難くない。だが、彼等が擁護するそれは本当に私たちの知っている「子供」なのだろうか。彼等を取り巻く状況は私たちの時代とは違う。経験の先取り、遅れてくる現実感、肉体年齢と精神年齢の乖離は非常に難しい問題である。もし人を殺したくてたまらない24歳の男が、朝起きたら14歳になっていたら？　今の子供はもう、われわれが知らない世界の住人になっているのではないだろうか。大人はなんにもわかっちゃいない――そんな子供の反抗に対してわかったふりをするのではなく、我々大人はそろそろ本音で接しなくてはならない「屁理屈言わずにガキは法を守れ」と。

（東京都・S・Tさん）

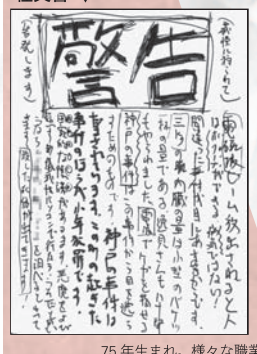
▼記者メモ

送られてきた怪文書によると、神戸市の事件はS市で起きている事件を隠蔽するための工作。S市の少年たちは普段から小動物を生け贄にして悪魔召喚の儀式を行っている。すでに何人か殺されている。凶器は鹿の角、地球儀のなかに心臓。

記者が事実関係を調査したが、裏は取れず。ただし、文書に添付されていたものと同じ写真を同市警で発見（写真）。

レリーフ。
地球儀。
凶器らしき鹿の角。

投稿に混じっていた怪文書 ▼



警告

Uminekozawa Meron

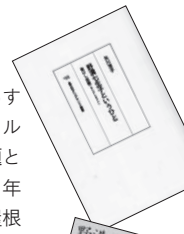
75年生まれ。様々な職業を経て作家に。住所不定を脱し、定住者に。各所を転々としながら作品を発表。著書に『左巻キ式ラストリゾート』（絶版）『舞 -HiME』『嫌オタク流』『零式』など。

文学 5

イーディとエロイーズと野溝七生子の棲むホテル

中森明夫
NAKAMORI AKIO

映画『ファクトリー・ガール』は、まだ観ていない。アメリカン・ポップアートの主護神アンディ・ウォーホルの工房（ファクトリー）が生んだ伝説の“60年代のミューズ”をモデルとした映画だ。時代のステージでぴかぴか輝いてる女子を見ると、ボクはすぐに「ああ、イーディみたいだな！」と思う。今なら川上未映子だね。えっ、未映子さんがイーディだとすると、本誌・市川真人はアンディ・ウォーホル、ワセブン編集室がファクトリーで、芳川泰久船長はトルーマン・カポーティってワケ？　な～んて連想は走ったりして。おっと早稲田文学の編集委員には青山南先生の名前がある！　青山南さんこそ我が国にイーディを知らしめた御方なのだよ。ジーン・スタイン、ジョージ・プリンプトン著『イーディ』という大部の評伝があって、それを中俣真知子氏や堤雅久氏らと共にかつて翻訳出版された（最近、再刊されてウレシ～♥）。青山さんには「甦るイーディ」と題する素晴らしい一文の収録された『人生はクレイジー・サラダ』というまるで宝石箱のような本があったっけ（文庫化してください、筑摩書房さん！）。同じくフローレンス・ターナー著『チェルシー・ホテル』（中川晴子・富永和子訳）もどっかで文庫化してくんないかなあ。ウォーホルにゃ、このホテルの一室でイーディらを撮った『チェルシー・ガールズ』なる実験映画があった。チェルシーはかのトーマス・ウルフやディラン・トーマス、ハーマン・メルヴィル等も宿泊した歴史ある芸術家たちの城で、先頃、亡くなったアーサー・C・クラークがスタンリー・キューブリックに依頼されて映画『2001年宇宙の旅』の原作を書いたのも、このホテルの一室だったとか。すると、ちょっと山の上ホテルなんか連想するね。けど、1970年代末には、英国のパンクバンド、セックス・ピストルズの元ベーシスト、シド・ヴィシャスが恋人のナンシー・スパンゲンを同ホテルで刺殺!?　アレックス・コックス監督で『シド・アンド・ナンシー』という映画にもなったっけ。件の映画でチェルシーでの二人の最後の日々を見ていると、なんだか虐殺される寸前の大杉栄と伊藤野枝が寄宿していた本郷・菊富士ホテルを思い出す。そういやウォーホルが女性運動家ヴァレリー・ソラナスに銃撃されたように（ジョン・アーヴィングの『ガープの世界』の結末にインスパイアーしてたね）、大杉栄は葉山日陰茶屋で女性運動家・神近市子に刺されてましたっけ。本郷・菊富士ホテルがチェルシー・ホテルなら、さしずめ帝国ホテルはホテルプラザじゃないっすか？　帝国ホテルが日比谷公園を見降ろすように、ホテルプラザはセントラルパークの隣にある。ビートルズも昭和天皇も宿泊した高級ホテルで、近年、買収騒動が話題となった。我がニッポンのバブル経済のきっかけとなった1985年の“プラザ合意”で歴史にも名を残してるね。そのプラザの屋根裏部屋に住んでる6歳の少女を主人公にしたのが、女優ケイ・トンプソンの書いた『エロイーズ』という絵本で、これがカワイイ♥（井上荒野の翻訳で出てる）。実際、ホテルプラザにゃ、エロイーズの肖像画が飾られてるんだってさ!?　ホラ、外国の人って「宿泊する」んじゃなくて、ホテルに「住む」でしょ？　デーブ・スペクター夫妻なんかそうだし、淀川長治さんもホテル住まいだったよね。伝説の作家・野溝七生子も晩年は新橋第一ホテルに住んでいた。その頃の交流を綴った矢川澄子の『野溝七生子というひと』と題する素晴らしい本があるよね。近年では、ホラ、尾崎翠とか久坂葉子とか伝説系の女子作家が復権してるけど、講談社文芸文庫にゃ『山梔』『女獣心理』なんて傑作も入ってる野溝七生子にもスポットが当たってほしいね～。先の伊藤野枝はダダイストの夫・辻潤の家から飛び出して（二人の子供が辻まことだね）、大杉栄のもとへと走った。モデル小説として瀬戸内寂聴の『美は乱調にあり』が有名だけど、続篇『階調は偽りなり』で野溝七生子と辻潤の関係をめぐる記述に猛抗議がなされるという一幕もあったっけ。ともあれ野溝七生子にしろ、伊藤野枝にしろ、いや、イーディ・セジウィックやナンシー・スパンゲンらチェルシー・ガールズ、さらにはホテルプラザの小娘エロイーズに至るまで“ホテルに棲む女”って、なんて魅力的なんだろう！　そういやカポーティの『ティファニーで朝食を』の女主人公ホリー・ゴライトリーの名刺には、その住所にtraveling（旅行中）と書かれていたという。人生は旅で、ホテルに棲むような一生を生きること。先の『ガープの世界』の傷ついた人々を癒す施設は“HOME”と名づけられていたが、その次作は『ホテル・ニューハンプシャー』だった。ホームからホテルへ。常に回帰する場所である家＝HOMEは、物語であり、帰るところのない永遠の仮の住まいこそが、小説＝ホテルなんじゃないかなってさ。



60年生。アイドル評論家。高取英の戯曲集『寺山修司』、田中森一著『反転』（幻冬社文庫）の解説を寄稿。1988年刊行の『オシャレ泥棒』以来、20年ぶりの小説作品「学校で愛するということ」を、現在「野性時代」にて連載中。

『ユリイカ』『現代思想』青土社

先端で、さすわ ささるわ そらええわ　川上未映子
いま〈ことば〉は〈少女〉となって、うたい、さわぎだす。芥川賞受賞の文筆歌手、伝説的デビュー作を含む7編。1365円

中原中也 天体の音楽　樋口覚
中原中也の詩を「韻」という視点から再評価し、音から星まで展開する決定版。谷川俊太郎、中村稔との対話収録。2310円

異郷日記　西江雅之
わたしにとって、自分の皮膚の外側はすべて異郷だ――。日本を代表する文化人類学者が綴る一三編の異郷案内。2310円

もうろくの詩（うた）　森毅
「詩の胞子も時代の風に舞って、……きのこの心を育て、自我を解体しながら、もうろくの自由を生きる」　1470円

ありふれた殺人　K・チャペック／田才益夫訳
カレル・チャペック短編集Ⅲ
ありふれた殺人事件を前に、なぜ恐怖するのか――。逆境の中の人間を豊かに描ききるチャペック版サスペンス・ドラマ。1470円

「近代の超克」とは何か　子安宣邦
昭和の戦争に随伴した未解決の難題をはじめて思想史的に読み解き、現代日本とアジアの関係に新たな視座を開く力作論考。2310円

価格はすべて税込
〒101―0064東京都千代田区猿楽町2―1―1桐山ビル
振替00190―7―192955　TEL03―3294―7829

水声社

三鷹天命反転住宅
荒川修作＋M・ギンズの死に抗する建築　三鷹に出現した極彩色の建築の全貌を多数のカラー図版と気鋭の批評家たちのテキストによって明かす。《私たちは，いまだ各人の能力の2～3%しか活用できていない。人間の，生命としての能力を最大限に発揮させる建築，天命反転住宅は，人類最大の革命である》(河本英夫)　5000円

マンガ編集者狂笑録
長谷邦夫　『カムイ伝』『巨人の星』『ブラックジャック』，そして『PLUTO』。マンガ史の舞台裏を支えた編集者たちの型破りな「マンガ愛」を，稀代のパロディストにして赤塚不二夫の盟友が縦横無尽に描く，痛快無比・純情可憐・妄言多謝の書き下ろし。　2800円

ミッツ
ヴァージニア・ウルフのマーモセット
シークリット・ヌーネス　杉浦悦子訳　第二次世界大戦前夜。ブラジルの密林からやってきた世界一小さなサル“ミッツ”。ウルフの小説，日記，書簡などを駆使して織りなすユーモアと悲哀にみちた新しいフィクションの試み。ウルフの伝記？ サルの伝記？　1800円

東京都文京区小石川2-10-1いろは館2F　郵便番号112-0002
tel.03-3818-6040　fax.03-3818-2437　http://www.suiseisha.net　［価格税別］

俺の人生に時給くれ！

池田雄一

連載⑧ウィトゲンシュタインのカバと、人類の敵

69 年生。文芸批評家。著書に『カントの哲学』。共著として『ネオリベ化する公共圏』。

この部屋にカバがいないことを証明することは無理です。ケンブリッジ大学の院生だったウィトゲンシュタインは、指導教官のラッセルにそう言って困らせたらしい。「わたしは、〈現在この室の中にはカバは存在しない〉という命題を考えてみるように、といった。かれがそんなことは信じないというので、わたしは机の下を全部のぞいて見て、カバを見つけることはできないといったのに、かれは納得した顔を見せなかった」(1)。いや、でもそうでしょう。カバがどんな存在なのか解らない宇宙人のような人に対して、ここに「カバ」がいないということを証明するためには、カバ自身を部屋のなかに持ってくる必要があるし、また持ってきた時点でカバは存在することになるのでは。おなじことが「カバの写真」を使っても言えるはず。写真を指さし「これがカバですよ」と説明しても、あいての宇宙人は「ではここにカバがいることになりますよね」とじつに冷静にかえすだろう。

だとすれば、この命題を「**いないものの不在を証明する**ことは不可能である」と言い換えることができるはずだ。この場にいないものがいないことを証明するためには、その当の「いないもの」を持ってくる必要があるはずで、だとすればそれを持ってきた時点で、その「いないもの」は存在してしまうことになる。よってその不在を証明することはできない。もちろん、じっさいにそんなことを問題にする人間はウィトゲンシュタインくらいだろう。それがふだん問題にならないのは、カバについての知識が共有されているからである。カバという存在が、知的な領域に「登記」されているからだ。これをカバのコード化と言っていいだろう。いないものが不在であることの証明は、こうしたコード化の作業を前提としている。そうした作業は存在そのものの領域とはちがった位相をもっている。こうして人間はカバの写真とカバそのものとを区別することができることになる。それ故に「この部屋にカバがいないことを証明すること」が可能であるような**風潮**が可能になるのだ。この命題のバリエーションについて考えてみよう。たとえば、**この部屋に敵がいないことを証明する**ことは不可能である、というような命題を目の前にすると、哲学的な頓智の問題にすぎないようなこの命題が、なにやら政治的な焦ささを帯びてくるではないか。

このように、「敵」とは、きわめて存在論的なトピックだと考えることができる。ここに敵がいないことを証明するのは原理的に不可能だし、カバの場合とちがって、可能であるような**風潮**をつくりだすこともまた原理的な困難をかかえている。敵とはその定義上、コードから排除されているのだ。故に人間はみずからの敵について想像しはじめると、その作業を終わらすことができない。ジョック・ヤングは、他者の文化を尊重する、という定義においてすでに、多文化主義は本質主義的な観点を内包していると述べている(2)。だとすれば多文化主義は、その定義上、**敵の本質化とその排除**を引きおこしやすいコンディションにある、と言えるはずだ。ヤングは包摂型社会から排除型社会への移行を語っている。包摂型社会では、自分の身体を「人類の敵」として世に差し出すという政治運動が可能だった。人類の敵としてふるまっている姿を目にして「はっ、でも彼らにそうさせているのは、じつは社会、というか私たち自身なのだ」という反省を人類＝市民にうながすことが可能であった。その点、デモ行進も自爆テロもかわるところはない。排除型社会では、そうした行動は、端的に彼らが「人類の敵」であることの証明として処理されてしまう。その結果として、自分が敵でないことを死ぬまで証明し続けなければならない、過剰適応の無間地獄とでもいうべき状況が想像できる。というかすでになっている。まったく批評もやりづらいったらありゃしない。その点、どうなんですか、総長！(3)　それとみなさん！

(1) 藤本隆志『ウィトゲンシュタイン』講談社、よりラッセルの回想を孫引き
(2) J・ヤング『排除型社会』青木秀男、伊藤泰郎、岸政彦、村澤真保呂訳、洛北出版
(3) くわしくは http://waseda080401.web.fc2.com/ まで

けものみち計画の文豪擬獣化宣言

④林芙美子＝イヌ

画 内澤旬子 ◉ Uchizawa Junko
67年生。世界各国を旅し、本作りの場から、図書館・屠畜場・トイレまでを取材。緻密な視線と果断な切り口で、繊細なイラストと、批評性と好奇心の絶妙に混在した文章を著す。著書に『センセイの書斎』や『世界屠畜紀行』など。http://d.hatena.ne.jp/halohalo7676/

文 南陀楼綾繁 ◉ Nandaro Ayashige
67年生。書物をめぐる文筆・編集に携わるとともに、古本・マッチラベルの収集家としても著名。不忍ブックストリートや「一箱古本市」の提唱者でもある。著書に『ナンダロウアヤシゲな日々』『路上派遊書日記』など。http://d.hatena.ne.jp/kawasusu/

学生の頃から、成瀬巳喜男監督の映画『放浪記』(昭和三十七年)が好きで、何度も観かえしている。成瀬は林芙美子の絶筆となった『めし』を映画化して以来、『稲妻』『晩菊』などの林作品を撮っているが、『放浪記』はその最後のものだ。母親に「むごい子じゃのう」と云われるほどクールだが、じつは人一倍涙もろい女性を高峰秀子が演じている。

映画での高峰は、いつも困っているように眉が下がっていて、華奢な感じだ。高峰は原作者の林芙美子の感じに近づけるよう努力を払ったということをナニかで読んだ記憶があったので、林本人もこんな風貌なのかと思い込んでいたが、後に写真を見て驚いた。あまりにも似ていない……。

映画と小説の違いといってしまえばそれまでだが、上京してしばらく経った頃の写真などは、ずんぐりと肥った犬のようだ。カフェーの女給などの職を転々としながら、本郷肴町の〈南天堂書房〉二階のレストランに入りびたり、萩原恭次郎、岡本潤らアナキスト詩人と交流し、この年だけで二人の男と同棲という「恋多き女」のイメージとはかけ離れている。

舞台版『放浪記』(主演は森光子)の脚本を手がけた菊田一夫は、不細工な女とか、男たちには女として相手にされてない、などとヒドイことを云っているし、『改造』編集者の木村徳三も『放浪記』の広告の「いかにも女流作家らしい風貌の写真」しか知らなかったが、実際に会うと、「五尺にもみたないような小柄のずんぐりした女性」「短足のめだつ洋装」だったので、はぐらかされた気持ちになったと回想する(『文芸編集者 その跫音』)。

つまり、『放浪記』のけなげでたくましい女性像は、彼女自身とジャーナリズムが共謀してつくったものだった。そのイメージと、生身の自分とのズレを埋めるために、彼女はさまざまな演技をしなければならなかった。そのため、かつて世話になった作家に不義理をしたとか、知り合いのことを悪く云ったなどと、風評が広がっていく。

没後の座談会で、芹沢光治良は林に鎌倉へ連れられていった思い出を語っている。ある作家の家に集まったが、芹沢が面白くなさそうな顔をしているのを見て、林はドジョウすくいを踊ったという。芹沢は「とにかく小説について、たいへん教えられました」と見下したように笑うが、とにかくこの場をもたせねばと焦る彼女の心中を思うと、悲しくなる。

生田武志

プアプア批評 8

Ikuta Takeshi

64年生。野宿者支援活動。著書『〈野宿者襲撃〉論』。連載タイトルは鈴木志郎康の「プアプア詩」に倣いました。ただし、ぼくのは「poor」のことです。

雑誌を出すときの「お金の話」をしよう。

大澤信亮・栗田隆子・杉田俊介・生田武志で有限責任事業組合（LLP）「フリーターズフリー」を起業した。出資者・組合員としてそれぞれがウン十万円を出資し、企画、執筆、原稿依頼、テープ起こし、編集、校正、会計、販売をすべて基本的に組合員で行なって雑誌『フリーターズフリー』を刊行する。膨大な時間とエネルギーをつぎ込むが、ぼくたちの原稿料は0円（もちろん、依頼原稿には原稿料を払う）。

『フリーターズフリー』創刊号は、去年6月に3000部を発売した（定価・税込み1575円）。実は、従来型の出版社→取次→書店というルートに流すと、それぞれで「中抜き」され、われわれには3～4割しか残らない。それに対して、自分たちでウェブ販売や手売りすると、（郵送料などの経費を別にすれば）1575円がまるまるわれわれに入る。そこで、赤字を出さないため、少なくとも次の雑誌を出すための資金を作るため、自分たち自身でがんばってかなりの数を直売してきた（ぼく一人で250冊以上売りました）。

発売以来1年経ち、幾つかの新聞や雑誌、そして高橋源一郎、星野智幸、中森明夫などから好意的に紹介され、販売した数は現在2200冊程度。会計担当としていろいろ計算した結果、最近、トントンを脱して黒字に転じたことがわかった。これは、「出資金は戻ってくるが、次号の資金にはまだ足りない」状態だ。2号を作るには、それぞれまたウン十万円の出資をする必要があるようだ。起業とは言いながら、自分たちがこれで「食っていく」なんてのはとても無理。しかし、なぜこのような手間をかけて起業しようとしたのか。

若者の貧困問題の大きな要因には、「不安定就労」「低賃金」がある。その問題の解決には、当然、労働運動によって条件を向上させることがある。これは幾つかのフリーター労組が取り組んでいる。また、行政に働きかけて労働法制を改善させる方法がある。これは「反貧困ネットワーク」などが取り組んでいる。そしてもう一つ、自分たち自身が起業して、賃労働以外のオルタナティヴな「仕事を作る」という方向がある。しかも、利益だけを目的にした雇用・被雇用の関係ではなく、社会的貢献と収益の両立を目指した「組合」による起業だ。それで「食っていく」のは無理だとしても、収益を多少でもあげることで、「賃労働」を相対化することはできるかもしれない。その一つの試みとして、ぼくたちは様々な不安定就労と「生きづらさ」の問題を当事者として発信する雑誌『フリーターズフリー』を作り上げた。

いま、ぼくたちは『フリーターズフリー』2号の刊行に向けて、原稿集めの山場にさしかかっている。そして、『フリーターズフリー』創刊イベントなどでの対談を集めた『フリーター論争2.0』を人文書院から5月1日に刊行した。ここには、組合員4人の他、雨宮処凛、赤木智弘、城繁幸、貴戸理恵、フリーターユニオンの小野俊彦、野宿者支援のちろるさん、元野宿者のそら豆さんが参加し、フリーター問題、貧困問題、野宿者問題、障害者問題、女性問題などなど様々な論点について、激しくかつ繊細な議論を展開している。この5つの対話を参照することで、「フリーター運動と、生存と労働をめぐる議論のネクストステージ」読者と一緒に模索していきたいと思っている。

みなさん、『フリーターズフリー』と『フリーター論争2.0』を買って読んで、ビンボー企業「フリーターズフリー」を応援してください！

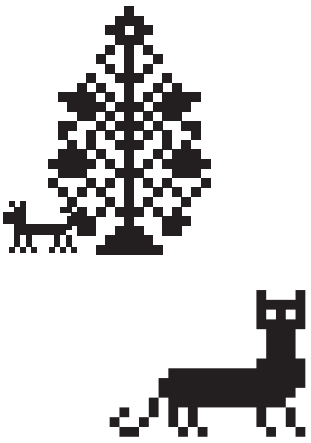
「林芙美子という名前を一度、この世の中からなくしてしまいたい」。有名になったにもかかわらず、居場所が見出せなかった林芙美子が求めたのは、恋と旅だった。昭和五年には満洲、上海を旅し、翌年にはシベリアを経由してヨーロッパに滞在する。彼女はパリで、複数の男に恋をするが、いずれも成就していない。日中戦争が始まってからは、戦地の南京と漢口、日本が占領したシンガポールなどに滞在した。デビュー作『放浪記』の冒頭に「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と記した林芙美子は、旅先で手持ちの金が乏しくても一向に動ぜず、言葉の通じない人たちに堂々とした態度で接している。

若き日の盟友だった平林たい子は、林芙美子は「いつも空しいものを握らされて地団駄をふんだ。そして結局飢えたまま世を去った」と書く。林芙美子は、いつものどを涸らしている一匹の犬だった。ずんぐりと丸いその犬は、つねに何かを求めてのっそりと動き続けている。

［連載］三か所
福永信

一か所

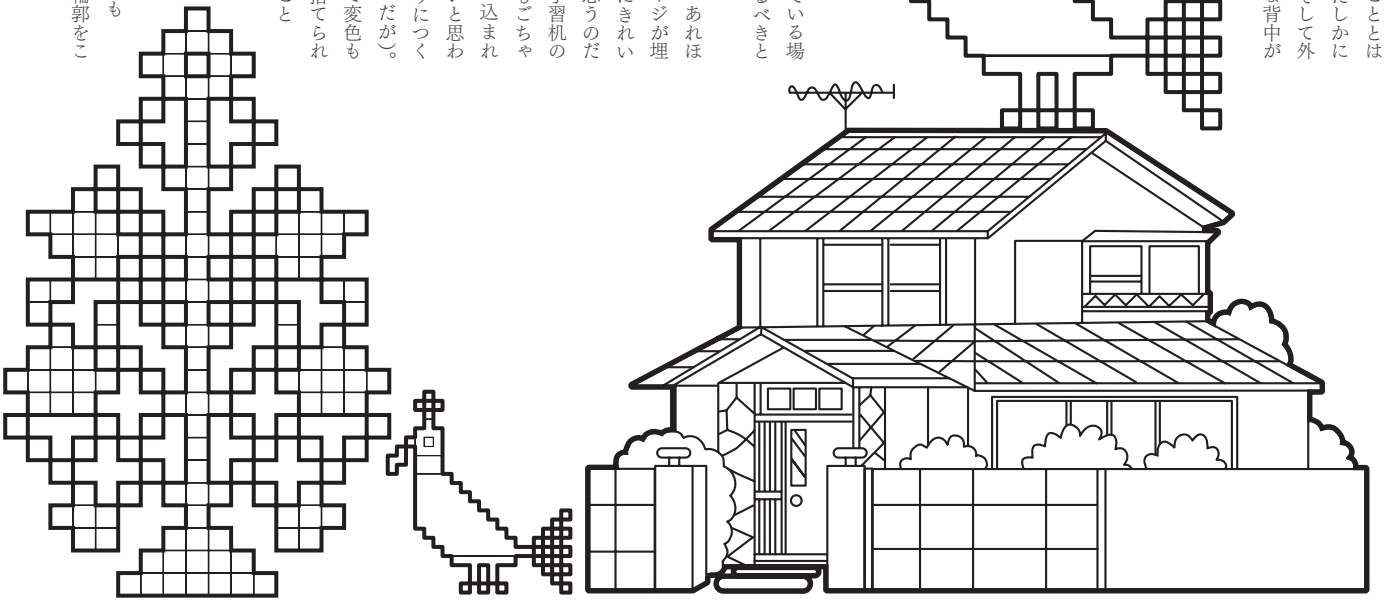
illustrated by 名久井直子



そこはスーパーの一角にある文房具コーナーでこの手の場所にしてはめずらしく三十六色もそろえた大型で高価な水彩色鉛筆セットを販売していた。それは今年着任した絵心のある店長と計算高い優秀なマネージャーによって入荷が踏み切られたものである。いま坊やがその小さなひざの上にのせて中身を検分している。ちょっとでもバランスをくずせばせっかく背丈がそろってとがらせてあるのがことごとく折れてしまうだろう。もっともそれを警戒して大人の背の高さにこの商品は並べられていたのであってどうしてこんな坊やが手にすることができたのかもしそこに店長ならびにパートを含む店員のだれかがいたのであればかならず不思議に思うはずである。また店の者にかぎらず良心的な大人が通りかかりさえすれば注意するはずだが昼時の殺気だった時間帯だからだろうかまったくの死角と化していたのだった。そのおかげもあり坊やはその一本一本を思う存分指でほじくって取り出すことができた。そのうちの一本をつかみそこねてしまい乾いた音がして床を少しころがった。かわいそうなことにその黄色の色鉛筆は完全に芯が折れた状態で元に戻されたのだった。ただしこれならあとで鉛筆削りでかりかりやればあるいは近ごろの子供はやらないかもしれないが小刀でしゃりしゃりとけずればまた鮮やかな色を取り戻すことができる。周囲はそのようになぐさめたのだが本人としては背が低くなったことに対してずいぶんショックを受けたようである。それでもあのぴったりとフィットする場所に戻れたのだからよかった方であるといえる。というのは水色の色鉛筆だけが不意にもう一度取り出され坊やのあたたかいというよりはむしろ熱い右手ににぎられたまましばらく帰ってこなかったからである。おいあいつはいったいどうしたいと騒然となったころフタがあわただしく閉められたのだった。坊やが立ち上がったのだと思われた。すぐに揺れはおさまったけれどもそれきり水色の色鉛筆がいた場所は空席となった。どの色にせよ色鉛筆がこれほど広範囲にわたって店内を移動したのは例がないことである。どこを向いてもはじめて見るものばかり。色とりどりの野菜や魚の光沢。様々なパッケージのパスタやお菓子。水色の色鉛筆は自分たちが井の中の蛙であったことを痛感したのだった。坊やはといえばこの間しばらく迷子だったようである。お母さんの姿を見つけたのは冷凍食品のコーナーだった。ずっと握られていた水色の色鉛筆はここで置いてけぼりとなった。はじめてくしゃみをした。

Cはその日はじめて一冊の塗り絵帳を買ってもらった。本当はキラキラと光るシールがほしかったのだがなかったといわれたのである。本当はあったのだがお父さんの目には映らなかったのだ。背が高いというのはこのようにときに不幸を呼ぶものである。もっともそれは何も背の高さにばかり由来することでもないかもしれない。なぜならお父さんは目の前にあったつまり子供には手の届かないところにあった色鉛筆のセットにすら気づかなかったからである。いくら外資系のスーパーとはいえいささか高価なその三十六色の色鉛筆はしばらくぶりに会う息子に対するおみやげに相応しいと思われたが目に入らなかったのだからしかたがなかった。それでもおみやげそのものを忘れたわけではなかった。本当は途中まで忘れていたのだが引き返したのである。デパートで買うつもりがスーパーになったのはそのためである。これならたのしみながら色彩感覚を養うことができるにちがいないと塗り絵帳を手にとってお父さんはこれを購入したのだった。Cは朝枕元に置いてある塗り絵帳を見てがっかりした表情を隠さなかった。だが礼儀上ありがとうと頭を下げた。そんなCが結局色鉛筆を握ることになったその心境の変化は本人にしかわからないことである。けれどもどのページも好きな色に塗っていいのを放っておくなどということがいつまでもできることとは思われない。キラキラと光るシールに比べるとたしかにじみである。けれどこの黒く太い輪郭線の内側そして外側も存分に塗っていいと考えるとぞくっと小さな背中がふるえるのだった。目を細めているのは白い紙がいつもよりまぶしいからかもしれなかった。描かれている者たちもいつもよりたのしそうに得意のポーズを決めているように見えた。彼らの活躍を毎週応援しているCはどの色も正確に塗る自信があった。ベルトも持っているのである。塗り絵帳はページをめくっても物語が展開するわけではないのだがこれも毎週テレビで見ているおかげで問題はまったくなかった。丹念にページをくっていたCだが一か所すでに塗られている場所があるのを発見した。それは本来は黄色であるべきところなのに水色で塗られていたのである。

完成された塗り絵帳のその後の運命はいかに。あれほど熱心に見開きに向かっていたのにすべてのページが埋まるとたんに見向きもされなくなる。こんなにきれいになったのだからむしろこれからではないかと思うのだが坊やがこちらを振り向くことはもはやない。学習机の一番いいとこを陣取っていた塗り絵帳はなんでもごちゃごちゃに入れる一番下の引き出しのなかに押し込まれた。そこで塗り絵帳はいつ処分してもかまわないと思われるガラクタたちとともにしばらくのあいだ眠りにつくことになったのである（本当は眠れなかったのだが）。ふたたび白日の下にさらされたとき若干しめって変色もしていて顔色が明らかに悪かった。もうだめだ捨てられるのだと思ったのだったが意外や意外そういうことではなかった。それどころかまたいいとこに陣取ることができたのである。ひとつ不審に思ったのは坊やの姿がそこにはないことであった。ご両親が時折訪れ塗り絵帳の熱心な読者になった。それは歓迎なのだが年のせいか涙もろいのが玉に瑕である。そのたびに色が溶けて輪郭をこえてほかの色とまじるからだ。



早稲田文学の本

こんな小説みたことない。

『怪道をゆく』
向井豊昭

定価 *1,575* 円

「ナビちゃん」と共に街道ならぬ「怪道」をゆく、リズム感あふれる奇書。「BARABARA 出版」なる架空出版社を興し、総手書きのコピー雑誌をゲリラ的に投下する、75 歳の著者による、7 年ぶりの単行本。

※価格はすべて税込です。

wasedabungaku classics

早稲田文学を支えた男の最後の批評集。

『記号の霙』
平岡篤頼

定価 *2,310* 円

第 8 次「早稲田文学」編集人でありヌーヴォー・ロマンを中心に数々の名訳を残した著者の最後の、井伏鱒二から小沼丹までを論じた批評集。教え子・堀江敏幸による敬愛あふれる書き下ろしエッセイ 30 枚も収録。

早稲田文学本誌、堂々復刊。

第十次
『早稲田文学1』

定価 *980* 円

「WB」でブンガクが楽しくなったら、「WB」でブンガクがわからなくなったら、次に手に取るのはこの 1 冊。川上未映子の新作から蓮實重彦のロング・インタビュー、ロブ＝グリエやシモンの新訳まで満載！

今秋、ぞくぞく刊行予定。

本誌『早稲田文学 2』
08 年秋刊行予定

新冊子「こどもWB」(仮)
08 年秋スタート予定

wasedabungaku classics
後藤明生 作品集
『笑い地獄』(仮)
解説・渡部直己
08 年秋冬刊行予定

仙田学 初作品集
『中国の拷問』(仮)
08 年秋冬刊行予定

第 23 回
早稲田文学新人賞原稿募集中!!

11 月 30 日〆切、上限 100 枚程度。送り先は早稲田文学編集室　〒162-0042 新宿区早稲田町 27

詳しくは WEB サイトにて。 www.bungaku.net/wasebun

発行・早稲田文学会　発売・太田出版　東京都新宿区荒木町 22　電話 03-3359-6262

Waseda Bungaku Free Paper

WB vol.13

WB は全国 42 都道府県＋海外 4 都市で配布中！

2008 年 7 月 1 日発行（年 4 回刊）

Published by　田島照久
Edited by　芳川泰久 (Editor in Chief)
木村安希子　青山南
下田桃子　江中直紀
武川葉月　貝澤哉
寺井ゆみ　十重田裕一
近藤景亮　三田誠広
西條弓子　山本浩司
窪木竜也
朴文順　市川真人 (Concept & Direction)
Design　奥定泰之　momoko
Photograph　王子直紀 (photographers' gallery) p1.4
田口まき (Mami) p17
Special thanks to　青木誠也　山崎貴之
山口元康　戸塚伎一

編集・発行　早稲田文学会／早稲田文学編集室
162-0042 東京都新宿区早稲田町 27-1F
TEL/FAX 03-3200-7960
Mail wbinfo@bungaku.net

印刷　凸版印刷株式会社
112-8531 東京都文京区水道 1-3-3
TEL 03-5840-4845　FAX 03-5840-1676
http://www.toppan.co.jp/

▼さて。秋葉原で無差別殺人が起こり東北では地震が起きて、石油や小麦の値段は上がり続け、非正規雇用労働者たちは困窮し、教えている早稲田でも法政でも学生が大学を介して逮捕され……なんとも暗い気分だけれど、地震はともかくそのほかはネットワークとセキュリティの問題をその本質に持っている、個人的にはそんなふうに考えています（とだけ言ってしまうと広すぎるように見えるだろうけれど）。それを論じるに後記は短すぎるしその場所でもない以上、私見はいずれ別の場所で書きますが、個別の問題を注視しないと解決しない具体的側面と、そうすることで見失われる本質や、逆に過剰に生ずる対立は、それら自体がネットワークとセキュリティに今日生じている事柄の二重写しでもあって、言い換えればそれらはどれも古典的な（つねにある）問題が、今日的なテクノロジーないし状況下で顕在化したにすぎない（いや顕在化させたそのようなものものこそが問われるべき）のではないか……そんなふうに考えるなか、自然発生的に生まれた座談企画も、池田雄一氏のコラムも、好ましきオルタナティヴとして歓迎したい校了の数日間でした。そして、急遽掲載することとなった向井豊昭氏の作品の生々しさは、それらを包括しつつ突き抜けています。ビバ・ジジイ！　みなさま単行本もぜひ。
▼編集室内のオルタナティヴとして、常勤に窪木竜也が加わりました。まだ先ですが、彼の組み立てた号の誕生する日をお楽しみに。　(lc)
▼「川上未映子の対談だぜ!」は 1 号お休みです。モブ・ノリオ「絶対兵役拒否宣言」は世界放浪中。
▼本誌「早稲田文学 2」はすこし遅れて 10 月後半～ 11 月の発行予定。新冊子「こども WB」もはじめます。詳しくは本誌 WEB サイトで順次お知らせします。新人賞応募作もお待ちしています。

▼日本語による文学・哲学・芸術表現の普及をめざす「WB」では、主旨に賛同・応援してくださる個人や企業の皆様からの広告出稿や配布場所提供等によるご助力を求めています（広告収入は部数と配布箇所拡大に用いられます）。関心をお持ちになった方は小誌編集室までご一報頂ければさいわいです。

CWS
クリエイティブ・ライティングスクール
創作学校

サマーセミナー 2008
作家になる!?

講師
諏訪哲史『アサッテの人』
青木純一「法の執行停止」
市川真人『小説の設計図』(前田塁計画)
ほか

【日時】
2008 年 8 月 30 日(土)
11:00～17:00
【会場】お茶の水・中央大学駿河台記念館
★申込・問合はお電話、ホームページにて☞

■CWS 創作学校は 1992 年創立の、日本初の本格的なクリエイティヴ・ライティングスクールです。
■通学および通信添削、インターネットで、創作技術を基礎から学び、編集者や新人賞の予選担当者などによる指導が受けられます。
■「すばる文学賞」や「朝日新人文学賞」ほか授賞の数々の新人作家がアマチュア時代に学んだところ、それが CWS です。
■受講およびサマーセミナーの受講料・プログラム等は、下記までお気軽にお問い合わせください。

CWS 創作学校事務局
〒102-0075　東京都千代田区三番町 30-8
第二生光ビル 301　株式会社アイ・メット内
TEL: 03-3262-0561　URL: www.cwsnet.co.jp

早稲田文学「WB」のバックナンバーはぱらっとで閲覧・検索！

読める！めくれる！検索できる！
Web 上で閲覧できる電子ブック
ぱらっと

早稲田文学 ぱらっと　検索

TRM 東京レコードマネジメント(株)
http://www.tgn.or.jp/trm/

現代作家が選ぶ世界の名作◉第十四回　選・村田沙耶香

夏の夜の夢

岡本かの子

歳子の兄の曾我彌一郎と、歳子の婚約者の靜間勇吉とは橋梁と建築との專門の違ひはあるが、同じ大學の工科の出身で、永らく歐洲に留學してゐた。文化人とは恐らくこの二壯年などをいふのであらう。彼等は近代の文化人とはあまりに知性が冴え返るその寂しさと、退屈をいつも事務か娯樂で紛らしてゐなければならないといふことを十分承知して、そして實際それをやつてゐるほどの文化人だつた。

歸朝後はいよ〳〵交際を密接にした彌一郎と勇吉とは、寵愛してゐるパイプ――ネクタイピン――卓上の一枝の花――を一方は割愛し、一方は愛用し始めるといつた無雜作な調子で、兄はその友人と自分の妹の婚約を取計つた。もつとも、二人の男同志の間には、歳子をよその人間には遣り度くない愛惜があつた。兄は折角素直に生ひ立つた妹の愛すべき性格を知らない他人に、猥りに逆撫でさせたくないといふ眞意から、また勇吉は自分が自分とはまつたく性格の反對なこのナイーヴなロマン性の娘を兄に代つて護り育てられる資格と自信を持つたものだから歳子の授受の內容には極めて親切で緊密な了解が働いてゐた。

「あの子は近頃どうしてゐるかね」

「あの子かね。は、は、は、あの子は少し退屈してゐるやうだね。僕が少し詰めて工房へ入り切りだからね。」

何か彌一郎と勇吉が外の會合で顏を合はす場合には、こんな問答が交された。歳子をあの子と呼ぶことに二人はお〳〵の立場で、歳子を愛し理解する默契を示し合つてゐた。

「ぢや、僕の方へ少し寄越しとけ、僕はここ三週間ほど仕事の合間だから、相手になつてゐてやれる。」

こんなふうにして歳子は婚約中の良人の家と兄の家の間を愛撫され乍ら往復した。幸ひ兄はまだ獨身だし、良人の家には叔母がゐたが、この中年寄は寄人の身分を自認して、何にも差出なかつた。

「一體こんな呑氣なことであたしいゝのでせうか。」

歳子は飽滿に氣付いて、あるとき婚約中の良人に訊いた。すると良人は思慮深く考へてゐたが、すぐ明るく眉を開いていつた。

「といつて、なにも强ひて苦勞を求めるのも不自然ですよ。まあ、呑氣にしてゐられるうちはしてゐるんですね。」

歳子は未來の良人の頭の良さを信賴すると共に、あまり抱擁力のある明哲なものに向つて、なぜかいくらか反感を持つた。

兄の家へ戻つてから間もない日のことである。歳子は兄と一緒に音樂會へ行つて歸りにベーカリーに寄つて、そこで喰べたアイスクリームのバニラの香氣が强かつたためか、かの女は家へ歸つて床についても眠られなかつた。腺病質のこどもだつた時分に、かういふ夜はよく乳母が寢間着の上に天鵞絨のマントを羽織らせて木の茂みの多い近所の邸町の細道を連れて歩いて呉れた。天地の靜寂は水のやうに少女を冷やした。するとかの女は踏む足の下が朧になつてうと〳〵として來た。かの女の口が丸く自然に開いて小さい欠伸が出た。目敏く見付けた乳母は、「さあ、やつと宵の明星さまがお手を觸れて下さいました」といつて、ふうわりかの女を抱き取つて家へ入り、深々と寢床に沈めて呉れた。

それを想ひ出したので、歳子はやはり寢間着の上へ兄が洋行土產に買つて來て呉れた編糸のシャーレで肩を包んで外へ出て見た。今更死んだ乳母に伴つて連れて歩いて貰ひ度いといふやうな幼い憧憬の氣持ちもなかつたが、さればといつて、兄や婚約中の良人にがつちり附添つて歩いて貰ひ度いと思ふ慾求も案外に薄かつた。二人の紳士は歳子の上に現はれる眠りのやうな生理的現象を生理的生活の必然的要求と受取つて、親切に勞つては呉れやうが、それ以上の深いものを認めては呉れないだらう。それは極めて幼稚な考へ方にしろ、あの乳母のやうに人間の總てのものとして、しんからの尊敬と神秘觀を持つてかの女を扱つて呉れる素質は兄にも良人にも全然なかつた。たとへ愛の手は同じでも、あの乳母とは感觸の肌觸りに違つたものがあつた。歳子は生れつきかういふことを感じ分けるに敏感な本能を持つた女だつた。

かういふ時にかの女は兄と良人と、そして自分との間柄を考へて、自分はある意味で非常に幸福な女であるかも知れないが、またかういふ自分の肝腎な氣持ちを自分に一ばん近しい人が了解しない以上、自分は却つて世の中で一ばん不幸な女であるかも知れないとも考へた。だが、このことは口でいつても判ることではなし、むしろ獨りで夜の空氣の中を彷徨する方が焦燥の感じを少くした。

歳子の兄の住む土地の一劃は、道路まで誰か個人の私有地になつてゐて、道の口々は柵門で防がれ、割合ひに用心堅固の場所だつた。女の眞夜中の一人歩きもたいした心配はなかつた。かの女はそろ〳〵出かかつた月の光を吸ひつゝ木の茂みから來る理智的な濕り氣と、大地から蒸發する肉情的な蘊氣の不思議な交錯の中に漂渺とした氣持ちになつて、いくつか生垣について角を折れ曲つた鋏を入れず古い茨の株を並木のやうに茫々と高く伸びるがまゝにした道の片側があつて、株と株の間は荒つぽく透けてゐた。何氣なく通るかの女は、同じく何氣なく垣の中からすうつと出て來た青灰色のブルーズ着の一人の青年とぱつたり顏を見合して、思はず立停つた。山中で珍らしく人と人とが出遇つたときのやうな眼の離されない惧れしさと、同時に物なつかしい感情がかの女の胸を掠めた。月光に明瞭に照された青年の顏は、端正な目鼻立ちにかすかな幽愁を帶びてゐた。青年はやゝ控へ目に聲をかけた。

「いゝ夜ですね。曾我さんの妹さんでせう。中へ入りませんか。」

歳子はさすがに狐疑した。「これはどういふ青年なのであらう。兄がこの近所に學校の後輩の家があるといつたが、大方それだらうか。」

青年はすぐ「今夜、うちの庭はとてもいゝですよ。」と云つた。

その聲はあまりに世の中の普通の言葉に何のかゝはりも持たない、卒直で親しみのある聲だつた。歳子は青年の誘ふその庭に自然する〳〵と入つてみる方に氣持ちを傾けてしまつた。しかし表面靜かに微笑して一應辭退した。

「有難う。でも――」

「懸念なさることありませんよ。」

「でも」

「あんたのお兄さんは僕を知つてられる筈ですよ。兄さんは僕の學校の先輩です。」

歳子はやつぱりさうかと思つた。かの女はさう了解がつくと妙な遠慮はいらないと思つた。

青年は牧瀨と云つた。その夜から牧瀨の庭を知り、その池の周圍の霎を知つた。それは淡々とした味を持ちつゝ何となく氣がかりの魅惑があつて、あとを引いた。

翌朝兄に話すと、兄は、

「牧瀨が歸朝してると聞いたが、やつぱりさうかい。うん、あの男は後輩の中でも天才的な特長があるらしいけど、多少變りものなのだ、根は君子人だ。さうなあ、交際つて別に毒になるほどのこともないが、利益にもならんね。」

といふ觀方で、强ひてかの女を阻みもしなかつた。

歳子は知らず〳〵二十日ばかりの間に、間を置いて七八夜も牧瀨の庭に遊びに行つたが、もう婚約の良人の家へ歸る期日も近づいたので、いよ〳〵今夜もう一晩ぐらゐの交際だと思つて、茨の垣の門內に入つた。

「今夜あたりはあなたが來さうな晩だと思ひましたよ。月の出が最初お目にかゝつた晩と同じですからね。」

牧瀨は歳子を迎へるなり直ぐかう云つた。

周りは小さい丘や築山の名殘りをとゞめた高みになつてゐて、相當な庭園だつた證據には、楓とか百日紅とかいふ觀賞樹の木の太さ

に、庭師の鋏けが殘つた枝振りで察しられた。歳子の兄の家の屋上庭園から春は雲のやうに眺められるその櫻の木も、庭の中にあつて近づいて見るとみな老樹だつた。中央の池泉は水が淺くなり、渚は壞れて自然の淺茅生となり、そこに河骨とか澤瀉とかいふ細身の澤の草花が混つてゐた。

石橋の架つてゐる中の島の枯松を越して、奥座敷に電燈が煌々とついてゐた。座敷の中には美術品らしいものが一ぱいに詰つてゐるのが見えた。だが最初の夜から歳子を一番驚かしたのは、一面茫々と生えてゐる夏草だつた。野菊もあれば箒草もあるが、兎に角、庭全體を壓倒して草の海原の感じだつた。

なるべくクローヴァーの厚く生え重つた渚の水氣の切れた邊に席を取つて、牧瀬と歳子はもう二三十分も神經を解放し、たゞ默つて夏の夜の釀す濃厚で爽かで多少腕白なところもある雰圍氣に浸つてゐた。蛙が低く鳴いて、月は息を吐きかけた程の潤みを持つてゐた。

「あゝいゝ氣持ち」

歳子は喰べても喰べてもうまくだけあつて、少しも腹に溜まらない飲食物に味ひ耽るやうについさう云つた。

「まだ、少女のときのやうに眠くなりませんかね。」

牧瀬は横にしてゐた體を悠々と立て直しながら、いくらか揶揄ひ氣味に訊いた。七八夜の間に歳子は今までの生涯の體驗やら感想やらを識らず知らず彼に話してゐた。

「眠くなつちやゐられないほどいゝ氣持ちよ。それとも眼が覺めてゐて眠つてゐると同じやうな氣持ちなのかも知れない。」

「うまいこと云ふ」と呟きながら笑つて牧瀬は、すこし歳子に躙り寄り、籐で粗く編んだ食物籠の中の食物と食器を掻き廻した。

「喉が渴きませんか。今夜はこれをあがつてご覽なさい。おいしいですよ。」

牧瀬は月にきら〳〵光らせながら魔法罎からコップへ液汁をなみ〳〵と注いだ。

歳子がそのコップを月にさしつけて、透してゐると、牧瀬は「水晶石榴のシロップです。シロップでは上品な部ですね。」と云つた。

それから彼は不器用にパパイヤを切つて小皿に載せ、レモンを絞つてかけてから、匙と一緒に差出した。藐姑射山に住むといふ神女の飲みさうな冷たく幽邃な匂ひのするコップの液汁を飲み、情熱の甘さを植物性にしたやうな果肉を掬つて喰べてゐると、歳子はこころがいよ〳〵樂しくなつた。蚤の喰つたあとほどの人戀しさの物憎い痒みが、ぽちりと心の面に浮いた。牧瀬のスポーツシャツの體からは、半人半獸のやうな健やかな感觸が夜氣に傳つて來た。

引用出典・『岡本かの子全集　第三巻』（冬樹社）

［解説］

夏の夜の感触

村田沙耶香

私の文章の読み方には二種類あり、一つは「ひたすら読み進む」という普通の読み方なのだが、もう一つは、「一節を何度もいったりきたりしながら繰り返し味わい、頭の中で執拗に嘗めまわし続ける」という少し変質的な読み方で、同じ箇所ばかり何十回も読み返したり、場合によってはいろんな大きさでコピーして眺めてみたりしている様子は、傍からみれば気持ちが悪いだろうなあと思う。岡本かの子の文章は後者の方法に向いていると、「夏の夜の夢」を読み返して改めて感じた。

私が岡本かの子の文章を初めて読んだのは、「病房にたわむ花」だった。読み終えてしばらくしても、桜の花の病的な鮮やかさがずっと瞼に残っていた。「夏の夜の夢」の中で牧瀬が案内してくれる庭は、視覚より触覚に、とても強く訴えかけてくる。足の指をくすぐる庭草の湿り気や、汗ばんだ皮膚の上を通り過ぎる風の生ぬるさなど、文章に直接は書かれていない感触までどんどん蘇ってくるので、何度眺め返しても違う味がして、飽きることがない。

この小説の主人公は夏の夜の感触そのものであるような気がする。実際の季節が夏に近づき、あの独特の匂いが夜に混じるようになってきたが、本物の夜よりずっと鮮やかに、この短い小説の中に夏の夜の気配が閉じ込められている気がして、この夏も、また幾度も同じ箇所を読み返してしまうのだろうと思う。

岡本かの子◉Okamoto Kanoko

一八八九年―一九三九年。与謝野晶子に師事し、歌人として活動した後、谷崎潤一郎の影響を受ける。芥川龍之介をモデルに小説『鶴は病みき』を発表。以降、死ぬまでの三年間に『母子叙情』『老妓抄』などを書いた。耽美的な作風が特徴。「太陽の塔」で知られる、「芸術は爆発だ！」の画家・岡本太郎の母でもある。

photo：ハービー山口

村田沙耶香◉Murata Sayaka

79年生。03年「授乳」でデビュー、やわらかななかにも不穏さのまじった、心ざわつく作風が持ち味。ベットタウンに暮らす少女の息苦しさと成長を描いた書き下ろし中篇『マウス』（講談社）を経て、最新中篇「ギンイロノウタ」（『新潮』08年7月号）で、その不穏と魅力はより色を濃くしている。

講談社◆話題の新刊

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

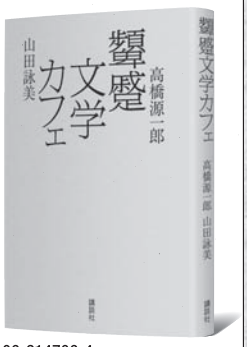
嗚呼、ヒンシュクな人。その名は、文士…

「文学」は低迷しているのか。死に体なのか。そんなことどうだっていいのだ。「文学」はある。実在している。どこに？小説の中に？ もっとはっきり、作家という変な人の形をして。私とエイミー姐さんは、「『文学』を見たければ、この人を見てください」と言うことのできる人たちを招いて、彼らのお話を聞くことにしたのでした。（「まえがき」より。一部改変）

顰蹙文学カフェ

ホスト 高橋源一郎 山田詠美

ゲスト 瀬戸内寂聴、古井由吉、車谷長吉、中原昌也、島田雅彦



定価1,470円（税込） ISBN978-4-06-214706-4

旧作異聞 14

斎藤美奈子◉Saito Minako
56年生。文芸評論家。94年、『妊娠小説』で評論活動をはじめる。他の著書に『たまには時事ネタ』『それってどうなの主義』など。

『わたしが・棄てた・女』（講談社文庫）

小林多喜二『蟹工船・党生活者』（新潮文庫）の売り上げが二十万部を超したという（毎日新聞五月三十日）。ワーキングプアの現状は『蟹工船』の世界に通じるところがある、というのが理由らしい。

文学の売れ筋はケータイ小説だったはずなのに、そうか、今度はプロレタリア文学か。なんという振れ幅だ！　とも一瞬思ったのだけれど、「ワーキングプア」つながりでいえば、ケータイ小説とプロレタリア文学は、意外に近しいところにあるのかもしれない。厳しい労働に耐えるには、妄想を必要とする。高尚な文学なんか、そこではお呼びじゃないのである。

いささか牽強付会ながら、ワーキングプア文学で、なおかつ現代のケータイ小説にも通じるところがあるという点で、私が思い出すのは、たとえば遠藤周作『わたしが・棄てた・女』である。初出は一九六三年の「主婦の友」の連載。その点からもわかるように、いわゆる通俗小説として発表された作品であったらしい（講談社文庫版に付された武田友寿の解説では、純文学とは一線を画した「軽小説」と紹介されている）。

舞台は敗戦後まもない東京。主人公は苦学生の青年＝吉岡努と、町工場で働く娘＝森田ミツである。あやしげなバイトで食いつなぎながら大学に通う吉岡とその友人の口癖は〈ゼニコがほしい、オナゴがほしい〉だ。その彼が出会い系サイトならぬ娯楽雑誌の文通欄で見つけたのが森田ミツだった。もともと期待していなかったとはいえ、待ち合わせの場所にやってきたのは、服装もみすぼらしく、美女とはほど遠い娘だった。吉岡は幻滅するが、結局は出まかせをいって彼女を渋谷の安宿に連れ込み、その日は抵抗されたものの、幼時に患った小児麻痺をダシに同情を買うようなことをいい、二度目のデートでことをなしとげる。

二人の関係はそれでおしまいだった。

吉岡は大学を出て、日本橋の小さな釘問屋に就職し、同じ職場で働く社長の姪と婚約する。エリートコースとはいえないまでも、まあまあ順風満帆な人生への第一歩である。一方、ミツの人生はここからどんどん不幸な方向へ転がり落ちてゆく。工場を辞めた彼女は、その後、歌舞伎町のソープ、川崎のパチンコ屋、いかがわしい酒場と職を転々とし、あげくハンセン病と診断されて御殿場の隔離病棟へと追いやられるのである。

さて、この作品をどう読むか。

もちろん、読者の紅涙をしぼるタイプの作品（なんて可哀想なミツ！）であることはまちがいない。吉岡がミツを性欲のはけ口として利用しただけなのに、ミツはたった一度関係をもっただけの吉岡を死ぬまで一途に慕いつづける。そこに注目すれば、純愛小説といえなくもない。

だが、レイプに近い形で「純潔」を奪われ、にもかかわらずその男を思いつづけ、一方、本人の人生は不幸つづきで、重大な病を得たあげく（結局それは誤診だったと後でわかるのだが）、交通事故で死ぬって……。これはいまの感覚でいうと、少女の恋愛を基調にし、ありとあらゆる不幸をてんこ盛りにしたケータイ小説の物語内容に限りなく近い。

注目すべきは、小説の要所要所で登場する「明るい星」なる雑誌である。吉岡とミツの出会いのきっかけもその雑誌。その後も吉岡は同じ雑誌の身の上相談欄で、自分たちとよく似たケース、すなわち〈大学生と手紙で知り合い、二、三度あった後、「純潔をささげた」のに、その大学生はそれっきり自分から離れてしまった〉という相談を目にしてミツのことを連想する。

「明るい星」とは象徴的な誌名といえなくもないけれど、この時代のことを覚えている人なら、即座に「明星」や「平凡」などの娯楽雑誌を思い出すはずだ。さらにいえば、芸能人の追っかけ情報と同時に、これらの雑誌の目玉記事がまさに「純潔をささげたが……」といった類いの体験手記であったことも覚えているのではないだろうか。そのように考えると、『わたしが・棄てた・女』という小説は、「明るい星」の体験手記を男の側の視点から描き直すとこうなります、という小説といってもいいのである。

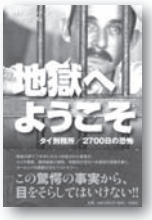
それにしても、吉岡の視点（「ぼくの手記」）で綴られた森田ミツの描かれようは凄まじい。二人がはじめて会ったのは〈きたない駅便所がすぐ横で鼻をさすようなアンモニヤの匂いがこも〉るような場所、ことが終わった後の吉岡の感想は〈赤茶色に陽にやけた畳も、蚊をつぶした血の痕と指の跡の残っている部屋の壁も、布団も水差しも、すべてぼくには急に不潔な吐気のするようなものにみえた〉といった具合だ。〈ぼくは今あの女を聖女だと思っている〉という枠が最初にはめられているために、「よごれた」「不潔な」といった形容で飾られれば飾られるほど、ミツの聖性が逆に際立つ仕掛けになっているのだけれども、森田ミツが「聖女」になりえたのもまた、彼女の唐突な死と引き換えだったことを忘れてはいけない。首尾よく死んでくれたからこそ、自分の俗性を懺悔に近い形で明かしながら、「ぼくの手記」を書けた吉岡。

「明るい星」を愛読しているような娘、とはこの小説が書かれた時代の感覚ではワーキングプア層の代名詞だった。妄想全開のケータイ小説もこういう時代ならではの、ポスト「明るい星」と思えば理解できなくはない。いずれにしても、女は死ぬんだけどね。中産階級でも、労働者階級でも。

2007年ノーベル文学賞受賞作家の傑作小説集！
老首長の国
ドリス・レッシング アフリカ小説集
【本邦初訳】 青柳伸子訳 ＊3990円
自らが五歳から三十歳までを過ごしたアフリカの大地を舞台に、入植者と現地人との葛藤、古い入植者と新しい入植者の相克、巨大な自然を前にした人間の無力を、重厚な筆致で濃密に描き出す。

星明りの村
フランス・ロマネスク聖堂紀行
西出真一郎 ＊1890円 ［聖堂へのアクセスガイド付］
ロマネスク聖堂の建つ町・村三十三箇所を日本の聖地巡礼になぞらえて経巡り、壮麗な聖堂の魅力、そこに生まれ暮す人々や旅行者たちとのあたたかい交歓を描き出す、詩情溢れるフランス紀行。

地獄へようこそ
タイ刑務所／2700日の恐怖 ＊2000円
コリン・マーティン 一木久生訳
無実の罪で七年半にわたり収監された著者が、タイの警察、裁判制度の腐敗、刑務所の恐るべき虐待の実態を暴く。ヨーロッパを震撼させたベストセラー。



泣血の原爆歌人
廉潔の生涯
父の遺した三十一文字。
高橋一起 ＊1680円
苦学した生い立ちを弱者への共感に昇華し、度重なる逆境を義侠的使命感で超克。日々の懊悩を鍖骨の短歌に凝縮し、不遇ゆえに実りある人生を送った感銘の生き様。

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/価税込
TEL03(3262)9753　FAX03(3262)9757

Mami http://www.mamiweb.org

（宣言！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！）

私たちは、MAMI による MAMI のための MAMI であり、MAMI を想像し、破壊する。私たちは MAMI に突入した。MAMI が流出する。

NO.004_　ファンキー☆ナオ

1985/2/22 生まれ　東京都出身。音楽をこよなく愛するもの。愛の伝道師になるべく自分の道を模索中。『大切なのは、どれだけたくさんの事をしたかではなく、どれだけたくさんの愛を込めたかということです。』（マザーテレサ）

動物。5 徘徊す

山本動物
Yamamoto Doubutsu
1973年東京都生まれ。85年頃ふとものごころがつく。以来ずっと動物。それ以前のことはよくわかりません。

先頃第3巻が出たばかりの西島大介『ディエンビエンフー（DBP）』と宮崎駿『もののけ姫』は似ている。もちろん『もののけ姫』は何にだって似ているのだから、わざわざ言挙げするようなことではないのかもしれないが、同時に似ているということは違っているということでもあって、むしろそのために「似ている」とは多く言われるのであるから、いましばらくおつきあいいただきたい。この両者に共通している構図は、一方に「自然」（サン―ベトナム）があり、片方に「人間」（エボシ―アメリカ）があり、基本的に後者が前者を侵すかたちで争闘関係にあるときに、その中間に位置するエージェント（アシタカ―日本）が調停するというものである。「自然」を体現するのが戦闘美少女であるとか、調停者がスティグマを持っているとか（呪いを受けたアシタカと1945年8月6日に生まれたヒカル）、鉄を駆る「人間」が同時に鉄に冒されていることとか、さまざまに類似点は挙げられようが、最も大きいのは（ゆえにそこでの相違が重要なのは）「自然」と「人間」の相克の結末における処理である。どちらも「自然」や「人間」どちらか一方の勝利を描くことはなく（そうであるならば、そもそも物語自体が描かれる必要がない）、ともにほろ苦い妥協といったものになるほかないのだが、そこでいつになるかわからないが「自然」との共存の道をかろうじて残す宮崎駿と、（おそらくは）ヒカルとお姫様（プランセス）が爆死し、つながれた手だけが残るという『DBP』冒頭に置かれた（おそらくは）結末部において、文字通り（描かれた通り）共存を描くと同時にその不可能性を描いた西島大介はほろ苦さの質の違いにおいて袂をわかつだろう。その差がどこから来るかと言えば、もちろん30歳以上に及ぶ年齢差、それによる歴史や文化の認識における世代差ということになるだろうが、端的にひとつだけ挙げると「アニメ（動く物）」への態度の違いである。歴史的ではあっても、歴史そのものは背景として持っていない『もののけ姫』はクライマックス（があるということがそもそも物語であることを示すのだが）において、「自然」の潜勢力にして「アニメ」そのもののようなデイダラボッチを登場させ、それをある種の苦渋とともに討つことによって、一定のカタルシスを持った調停をもたらすことができた。換言すれば、「アニメ」の死をもまだアニメは描けるという健やかな信頼がそこにはある。一方、同時期に違ったやり方で「アニメ」の死を告げたアニメ『エヴァンゲリオン』の影響下で映像作家としてスタートして（『エヴァ』直後に作られた『video』の絶望的にポップな浮遊感は素晴らしい！）、（動かない絵であるところの）マンガを主戦場とするようになった西島大介は、だからこそ、ベトナム戦争というやはり動かないものである「歴史」を背景とし、ゆえに、その世界にはフレームの外（あるいはフレーム自体）といった〈外部〉が存在せず、そこには死（動かない絵）をもって死を描くという健やかな諦念が存在することになる（「世界は変わらぬ」「人間とは度しがたい」共に『DBP』3巻）。そう言ってしまえば、いかにも、「アニメ（＝動く物＝変化）」の死以降のポストモダン的ニヒリズムの最新表現ということになってしまうのだが、ただ、ただちに付け加えなければならないのは、言うまでもなく『DBP』がまだ完結していないことであり（15巻を超えるとのウワサ!?）、また、西島が表現のレベルにおいては、いまのマンガにしては異例なほど動きへのこだわり、というかほとんど動く物を描くことのみで物語を成立させている点を注視するべきであるということだ。「人間」も「自然」も「調停者」もひとしなみに動かない動く物に変換し、その動きを延長していくことで、動かない歴史を変換し再生すること、アニメの中で再生を描くのではなく、アニメごと再生すること、それを西島大介は虎視眈々と狙っているのかもしれず、その歩みを「おばあちゃん」と共に「のんびり」見守りたいと思う。

ビールの泡 ④ブルックリン

大久秀憲 *Ohisa Hidenori*
72年生。早稲田文学新人賞、すばる文学賞ダブル受賞の、元祖再チャレンジ小説家。同時期の綿矢・金原旋風も遠い出来事のように、はやくも老境に達した作風を淡々と保つ。夫婦で一晩一樽のビールを飲み干す日々。

ブルックリンへ足をのばしてみようと思う。マンハッタンのめぼしい酒場はだいたい巡った。

いくのはいいが、大丈夫だろうか。なにしろ僕は、自分はつねに北を向いていると思いこんでいるほどの方向音痴だ。まるで方位磁石の針だが、狂っているのだから無意味だ。

このあいだ国技館に五月場所を見にいって、向正面の席だった。右が東で左が西で、ということは前が北で、地図の凡例どおりなので分かりやすかった。以前正面の席で見たときには右が西で左が東で、鏡のなかにいるようだった。

まるきり地図が読めない。地図しか読めない、といった方がいいだろうか。地図のとおりに街がひろがっていないと困るのである。もちろん街は地図のとおりにあるのだが、地図はたいらなのに、そこから目を上げた世界には高さというものがあるではないか。そのとき、地図と街は僕のなかで永久に乖離する。地図が僕の方向音痴を育てたともいえる。

マンハッタンは道が碁盤目状に走っているので、迷ったとしてもブロックを一周するうちに僕の東西南北と現実の東西南北が合致して、そうなればあとは街が目的地まで運んでくれたが、ブルックリンではそうもいきそうにない。

妻にたのんで連れていってもらった。

ブルックリンに住む作家ポール・オースターが脚本を書いた映画『スモーク』にも出てくるその酒場は、大通りからはずれた住宅街の一角にあった。

昼下がり、薄墨色の木の扉を押した。窓が大きく取られ、格子の影が擦り切れた木の床に落ちていた。十人ほどが座れるカウンターと、立って飲むスペースがいくらか取られてあるさほど広くはない店だった。天井が高い。奥の部屋にビリヤード台が見えた。キャップをかぶったおつまみ持参のおじさんが席をつめてくれ、この店は古いよ、といった。父親も通っていたよ、といった。1875年からの酒場だという。

つぎの日ひとりでおとずれた。昨日からだに染み込ませた経路を、一点もたがえずなぞっていく。方向はうしなわれているのだ。地図はなんのたよりにもならない。記憶によるナビゲートでゆくしかなかった。

その日もカウンターでくつろいだ。きびきびとした女性バーテンがビールを一杯おごってくれた。すこしゆっくりしすぎたらしい、外はすっかり暮れていた。

まずいことになった。僕にインプットされているのは陽のあるうちの経路なので、暗くなると使えない。明るいうちでも雨が降ったりすると十全に機能しない。内田百閒の飼い猫ノラは帰り道を大雨に流され、その後すがたを見せることはなかった。僕のブルックリン経路はそのように、自然の影響をおおきく受けるという、ほとんどけもの道のような性質からなっていた。

少々酔いはまわっていたが、そのことが帰路の回復の妨害にはならなかった。方向音痴なやつがビールを飲んで少々酔った、というだけのことで、傷だらけの僕の方向感覚がこれ以上傷つく余裕はないのである。

気がつくとカーネギーホールの前にいた。あとできけば、酒場の位置とアパートの位置からいって、地下鉄の路線の網をどうかけてみても普通絶対そんなところへはいかないのだという。僕は自分の方向音痴を誇りたくなった。ただまちがえるのではない、むずかしくまちがえている。そのうえで帰りつくという目的が果たされている。なにか、正常な方向感覚に一矢を報いるような思いがした。

赤いマークの1ラインの駅が見えたときにはほっとした。これに乗ってしまえばアパートについたも同然である。どれくらい街をさまよったろう。しかし降りてみるとそこはなぜか、夜のひとり歩きにもっとも不向きなハーレムだった。僕はまちがいつづける。

四方田犬彦 Yomota Inuhiko と星と走る

④ 四方田の戒

中学生のころ、SF に一時凝っていたことがあった。そのとき何かの雑誌のコラムで、作家のアイザック・アシモフがいよいよ 100 冊目の著書を刊行することになり、それがなんとこれまでの 99 冊の小説の要約集であると知って、呆気にとられたことを記憶している。なんと洒落たことをという気持ちと、100 冊も本を書くなんてスゴイなあという気持ちを、同時に感じたのである。

ところが今年になって、わたしもまた 100 冊目の本を出すことになってしまった。鹿島茂に遅れること 3 年である。『四方田犬彦の引越し人生』が 98 冊目、『いつも香港を見つめて』が 99 冊目……というわけで 100 冊目はアシモフに倣って、これまでのすべての書物のハイライト集にすることにした。1980 年に朝日出版社から『リュミエールの闕』という映画批評集を出して以来、よくもまあ 28 年間も売文稼業を続けてきたものである。

ここで 100 冊を記念して（？）、四方田犬彦みずからいう 7 つの戒律を、座興として記しておきたい。

①文芸時評や文学賞選考委員を引き受けないこと。
②学会に加盟しないこと。
③集団を後ろ盾にした発言をしないこと。
④文章を書くさいにチョンチョンコンマ（“ ”）を用いないこと。
⑤レストランの名前を自慢げに記さないこと。
⑥ H ものを書かないこと。
⑦不必要なカタカナをできるだけ文章から追放すること。

若干の解説をしておくと、①は端的にいって、人の上に立ちたくないからである。あるモノを選択し、あるモノを排除するという運動に加担したくないからだ。わたしは批評というものは、モノをじっくりと睨みつけることだと信じているが、そこにできるかぎり他の排除という要素を絡ませたくない。と同時に、読む時間がないという物理的な事情もある。自分の探求の仕事のために読んでおきたいテクストが、それこそ世界中の言語で山ほど書かれているというのに、どうして毎月の文芸雑誌に登場する小説を読むことで月の半分を費やさなければならないのか。まあ、そんなことを考えているから、わたしはアマチュアの「文芸」評論家なのだろう。

②と③は、要するに徒党を組みたくないという一語に尽きる。③は高校時代に読んだ吉本隆明の喧嘩の仕方から学んだ。わたしは他人に庇護されるようなエクリチュールに与したくないのである。

④は、自分の文章に気の弱さを反映させたくないという意味である。チョンチョンコンマは、自分が責任をとりたくない言葉を用いるときに、それを匿名的な他者に帰属させる身振りであり、現在の日本の支配的イデオロギーへの無自覚的な加担の証拠である。⑤と⑥は、とにかく嫌いとしかいいようがない。性的なことに人間の究極の真実が宿るというイデオロギーに我慢がならないのと、いかなる人間の性的体験もひとしく凡庸なものだと理解しているためだ。まあ身近に、何人かの「性豪」の末路を見てきたことがトラウマとなっているのかもしれない。最後に⑦は解説不要だろう。わたしはイメージをも「映像」と書いてしまう人間なのだが、それというのも、これぞというところでカタカナを際立たせたいためである。

7 つの戒めを書いたついでに、四方田の 7 つの致命的な欠陥を書いておこう。

①ミステリが読めないこと。沢山の人名と新造語を記憶すると思うだけで、疲れてしまう。クロード・シモンのほうが楽。
②いつも少し食べ過ぎてしまうこと。
③いつも誘惑にだけは負けてしまうこと。
④女性の顔をなかなか憶えられないこと。
⑤自分が馬鹿にしている人の前で、それを隠すことがどうしてもできないこと。
⑥退屈に耐えられないこと。
⑦人が真面目に話していると、たいがい眠くなってしまうこと。

53 年生。宗教学・比較文学を学び、日本の大学教授であるとともに韓国・アメリカ・イタリア・パレスチナなど、世界中を放浪する文学者。『貴種と転生』は最も早い中上健次論のひとつであり、その後の中上論にも多大な影響を与えている。映画についても充実した著作を次々発表するほか、都市・美術・音楽・料理・民族差別・漫画と、幅広い活躍領域を持っている。主著に『月島物語』『映画史への招待』『モロッコ流謫』など。

♤教科書ってつまんなくね？
♧ムシ●ングしてえ。
♡ナ〇トのほうがいいよ。
♢っていうかこの質問ウザ。

ちょっと待て。こどもＷＢがある。

「WB」と「ワセブン」から飛び出す野生の副読本、フリーペーパー「こども WB」ただいま企画進行中。詳細は秋の「早稲田文学 2」ほかにて。

en-taxiから生まれた単行本!

重松清氏激賞「これはぼくたちみんなの物語だよ」
たとえば、世界が無数にあるとして
生田紗代 著 ■定価1,470円(税込)

ポップとしてのアメリカ。とは何だろう
アメリカ 村上春樹と江藤淳の帰還
坪内祐三 著 ■定価1,680円(税込)

落語ファンならずとも絶対に笑って泣ける、極上の青春物語。
赤めだか
立川談春 著 ■定価1,400円(税込)
重版出来!!

超世代文芸クオリティマガジン

◆エンタクシー バックナンバー◆
書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

en-taxi
ODAIBA MOOK No.22 SUMMER 2008
[エンタクシー] 22号
A4変型判 定価980円(税込)
責任編集 福田和也 坪内祐三 リリー・フランキー
6/28 発売

[大特集] 小林秀雄、批評のビートニクス
赤瀬川原平／湯浅学／豊田泰光 他
[特集] 人はなぜ賭けるのか 賭博めぐりの感興と痛切
植島啓司／玄月／原武史／中野翠 他
好評「赤めだか」&歌舞伎座〈親子落語会〉記念 立川談春・座談三部作
Ⅰ立川談志 Ⅱ坂井真紀 Ⅲ柳美里
[小説] 前田司郎「半魚人、夏の水」(210枚)
森内俊雄／杉作J太郎／中原景 他
〈鼎談・文学の器 最終回〉「昭和から平成への文学の変位」
坂本忠雄／福田和也／坪内祐三
角川春樹句会手帖 夏之巻 正客・ねじめ正一
[連載] カメラと歩く〜東京大周遊日誌
写真・文／田中長徳 &特別篇・田村彰英

扶桑社 〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1 http://www.fusosha.co.jp ◎お問合せ先 販売グループ ☎03・5403・8859（月〜金10:00〜17:00） 全国の書店でお求めください。

「おれはマッチョだ」って自覚してる男のほうがまだマシでしょう。所有欲に自覚的なひと。

[海猫沢] これは女の子じゃなくて、妖精さんなんだよ！　エロゲの精だから消費されないと淋しくて死んでしまうんです！

[中村] あ、音楽はじまった。おわりなんですか？

[戸塚] いや、いまプロローグがおわったところです。ここから本編スタート。

[山崎] ええええ!!!　いまからなんですか!?

★

愛のエロゲナイト・感想戦篇

[戸塚] さきほどの3姉妹モノのゲームをはじめ、今日は5本のゲームをプレイしていただいたわけですが、まずお伝えしておきたいのは、それらはエロゲーのなかでも、ある一面でしかありません。もっと女性に酷いことをするゲームもあれば、ストーリーのおもしろさで進めていくゲームもあります。それを一応ふまえた上で、みなさんいかがでしたか。鹿島田さん、めろんさん、長嶋さんはプレイ経験あり、柴崎さん、山崎さん、中村さんは初めてのプレイでしたが。

[柴崎] みんな反応が違うから、それを見てるだけで楽しかったですね。めろんさんの反応とか、「こうやって遊ぶのかあ」って。

[山崎] 早送りできるのが新鮮だった（笑）。

[長嶋] もちろん「女性」もこの3人でぜんぶじゃないし、「男性」もこの3人でぜんぶじゃないから、単純に言うべきではないんだけど、女性の三者三様ぶりはおもしろかったです。

[戸塚] 鹿島田さんは？

[鹿島田] この集まりは、「いかに男性のご都合主義的要素をあばくか」をめざして言い出したんだけど、もう一方で、女性も「性」を楽しむことだってあっていいんですよね。最初、女性だけでやる企画だったけど、実際にみんなでやってみて、それはそれで楽しかった。

[中村] 「ご都合主義」を楽しむの？　うーん、ぼくはやるよりやらないほうがいいんじゃないかって思っちゃうけど。

[長嶋] みんな「ご都合主義」だと思っても言わないところを、こういうゲームをやりこんでる鹿島田さんがいちばん言及してくれたよね。

[山崎] 途中で長嶋さんや鹿島田さんが言ってたみたいに、「ゲームをする側に『お金を出してるんだから、相手をコントロールして当たり前』って意識がある」というのがおもしろいな、と思いました。「そのために遊んでいるんだ」って自覚があるひとのほうが、コミュニケーションとりやすい感じがしますね。

[鹿島田] 「健全な大人の娯楽」って自覚が必要だと思うんですよ。

[中村] 大人がやるものなんですかね？

[海猫沢] 実際のところは……。

[戸塚] 法的には18歳以上ですが、もちろん法律をくぐりぬけた10代もいますよね。

[長嶋] 主要ユーザーの統計ってあるの？

[戸塚] わたしのかかわっている雑誌の読者層で言うと、男性・20代後半〜30代が多いですね。

[鹿島田] それで実際に性行為をしなくなるのは、不健全な気はするさ。

[山崎] 自分の欲望を把握していて、それを肯定したくて遊んでるなら楽しいんだけど、欲望を否定しちゃうと、ダークな方向に走るのかなあ……。

[海猫沢] いや、ゲームとそれは別です。もっと純粋にキャラに恋して救われるひとだっている。

[長嶋] 今日はエロゲーの「いい・悪い」を表明したいわけじゃないからね。それを言うにしても、ここにいる人間たちでは偏りすぎてるし。

[山崎] ゲームや表現の世界で、なにかを否定したり自由をせばめたりはしたくない。

[長嶋] でも、主要購買層が30代っていうのは、テキストの妙なおっさんくささからわかるね。

[柴崎] むかしの官能小説みたいでしたね。

[中村] 「歴史がつくりあげてきたテンプレート」だよね。

[鹿島田] おっさんくさいのが普遍的なのかな……じゃあ、小説を書くわたしたちはどうすればいいんだろう。

[海猫沢] おっさんくさく書けばいいんですよ！

[山崎] わたし、若いころは「男性作家が考えるヒロイン」に拒絶反応があったんですよ。

[柴崎] 「そんな女の子いないよ」みたいな？

[山崎] はい。「〜だわ」みたいな。でも最近は、男のひとが理想の女性を書いてしまっている作品も、おもしろいと思えるようになってきました。

[鹿島田] わたしは自分の作品で「よろしくってよ」とか書いてるし（爆笑）。翻訳文体を採用したから。

[山崎] 「理想を言うな」とは、男のひとに言いたくないですよね。

[柴崎] でも、最初のゲームに出てきた女の子みたいのが好きなんだなって、そういうニーズがあることはわかった。

[山崎] 「おれはこういうのに萌える」って世界があるのは、いいですよね。

[鹿島田] 男も女もそれがイデア的であることを自覚していればいいんじゃないかな。そうすれば3次元の恋愛もするだろう。

★

[戸塚] ストーリーを読み飛ばして楽しめる、という点はどうですか？　魅力的な絵があって、文章はおまけというか。でも、ユーザーはまったく気にしてないかと思うと、「ゲームはシナリオだ」という意見もあったりで。

[長嶋] 「シナリオがいい」って言われるエロゲーが、エロ抜きになって家庭用ゲームになったりするよね。それは本当にシナリオがいいのかもしれないけどさ、「たんなるエロじゃないですよ」って免罪符を主張してるようにも思える。作り手も遊び手も「自分たちは不毛なことばかりしてるわけじゃありません」って言いたい欲求があるんじゃないかと。

[鹿島田] でも、わざと表現を稚拙にして官能のレベルをあげてますよね。マルグリット・デュラスも『愛人（ラ・マン）』で、官能のレベルをあげる場面では、エクリチュールにおけるカタルシスや癒しを抜いてしまったりする。それは作法のひとつとしてあるでしょう？

[山崎] わたしはふだんゲームしないから、思考の流れがわからなかったんです。でもそれでいちばんショックだったのは、相手と自分が、5㎝くらいしか離れていない耳元でも「おーい」って呼ぶしかできないゲーム。

[柴崎] 3Dのゲームだよね。ストーリーがないにもかかわらず、エロシーンも見られなかったヤツ……。

[長嶋] なにをしていいかわからなかったね（笑）。

[山崎] 非難してるんじゃなく、ただただ寂しい気持ちになりました。5cmしか離れてないひとに「おーい」なんて言わないよね。でも、小説にもそういうところがあるのかもしれない。

[柴崎] 現実として捉えたら「おかしいんじゃない？」って言われることとか、わたしたちも書いてるんだよね。

[戸塚] 今日やったほかのゲームはノベルゲームの延長。3Dのは、それ以前からあるテレビゲームの延長ですからね。

[長嶋] そういう齟齬は、とくに3次元のゲームに起こりがちだよね。「バイオハザード」とかでも、なんでこんな動き方するんだ？　みたいに見えちゃうときがある。RPG初期の名作、「ブラック・ガーネット」は、町でひとに会ったときかけられる言葉がみっつしかなかったんですよ。「Join us（仲間になろう）」「Good bye（さようなら）」「Your money or life（金をよこせ）」。でも、さっきのはただひとつ、「おーい」だけ（笑）。

[山崎] 風景がすっごいリアルなのに、言葉が「おーい」しかない。

[鹿島田] 純粋に性交のシーンを抽出するのが目的ですよね。

[長嶋] 80年代からゲーム表現が一回りして、「おーい」に絞り込まれたんだな。

[柴崎] わたしはルールを覚えるのがめんどうでゲーム自体が苦手なんです。でもエロゲーはすごく単純だなって思った。攻略本も知識もいらないし、操作も簡単。

[海猫沢] エロゲはディ●ニーラ○ドなんだよ。ディ●ニーラ○ド行って、アトラクション以外の現実のあれこれは不要でしょう？　純粋に愛だけあればいい。

[長嶋] 女装したショタコンのゲームも、選択肢なかったよね。読む速度だけがプレイヤーにゆだねられてる。

[山崎] めろんさんが操作してくれてたけど、読むのすごく速いなと思ってたら、読んでなかった（笑）。

[海猫沢] ゲームは読むんじゃない、感じるものなんです。

[柴崎] だからあの速さでも「せつない……」って言ってたんですね（笑）。

★

[中村] でもほんと、選択肢は少なかったですよね。どちらかというと、擬音のある小説。モノローグと会話だけの小説。

[長嶋] 今日やったなかだと、BLのソフトがいちばん頭を使わせるし、選択肢もあったよね。

[鹿島田] 過程を大事にするのがBLなんですよ。男性向けのエロゲーは、「おーい」に象徴されるように、呼んで性交するか、モノローグばっかりで性交するか、どっちかなんだけど。

[長嶋] 欲望のありかたはひとによって違うからね、だから早送りもできる。

[柴崎] あれは早送りしないときもあるの？

[海猫沢] あります。でも、読みたい感じがする箇所はわかるんですよ。読んでなくとも「このへん！」って思う。ゲームやってるときもいま話していてもそうなんだけど、おれだけみんなとOSが違う感じがする。

[戸塚] ゲームやってるときは、ムードをリアルタイムで感じるというか、体験するんですよね。「流れて感じる」というか。

[海猫沢] 世界に入らないとダメだけどね。まあ、完全にデータベースの世界だよね。自分がもってるデータベースを参照しながらプレイしてる。

[山崎] わたしにはそのデータベースがないから……でも、それをひとが夢中になってやっているのを見るのは楽しくてびっくりしました。

[長嶋] 実際、そういう楽しみ方がはじまってるよね。「ゲームセンターCX」とか、ネットの動画でも、ゲーム単体で楽しいんじゃなくて、ゲームで遊んでるひともいっしょに映った動画を流すようになった。コントローラーもってなくても楽しめるようにゲームの遊び方が広がってきてる。まあ、ほかにひとがいると、なんでもおもしろい気がするけど。

[山崎] 正直言って、ひとりじゃ楽しめなかった。

[中村] 大勢で楽しむものじゃないんだけどね（爆笑）。

[柴崎] 毎週やろうとは思わないけど（笑）。

★

[長嶋] エロゲーじゃなくても、家庭用ゲームでも「メタルギアソリッド」の3は、エヴァっていう色っぽい女が出てきて、すっごい胸元あいてんだ（笑）。その女とどうなるか見たくて、純粋にその欲求でクリアーしたよ（笑）。

[鹿島田] そうそう。「ロシアなのに、その格好はなんだ！」みたいな。

[長嶋] クリアーしたら家庭用のゲームなのに、ハリウッド映画ぐらいの濡れ場はあった。あのゲームは、モーションキャプチャって、現実の人間の動きを読み取るセンサーでつくったんだけど、小島監督に「あの濡れ場よくやりましたね」って言ったら、監督が男のスタッフに抱きついて動きを読み取ったって（笑）。でも、なんでほかの家庭用ゲームに濡れ場はないんだろう？　エロゲーではすごい直截なセックスを描くのにさ。

[柴崎] ふつうのゲームではまったくないの？

[戸塚] エロゲーはパソコンばかりですね。基準もその時代ごとに違うんですが……。

[長嶋] 「アイドル雀士スーチーパイ」事件とかね。

[戸塚] ゲーセン用の脱衣麻雀なんだけど、セガ・サターン版で出たとき、アーケード版では存在した乳首がなくなっていた、というやつですね。あとで発売されたリミックス版では、戻ってましたが。

[中村] 自主規制なんですか？

[山崎] 乳首ダメって、あんまりよくわからない。なんでそこに線引きがあるのか。

[長嶋] ふつうの民放のテレビでも濡れ場はあるのに、ゲームにはない。90年代のマンガ規制の延長なのかな？

[戸塚] むかしは「ウラ技でモザイクを消す」ってのもありましたが。いずれにしても、「テレビゲームにラブシーンはマズい」みたいな暗黙の了解はありますね。

★

[長嶋] やっぱり、小説家にとっていちばんおもしろくも驚異にもみえるのは「Ctrl キー飛ばし読み」じゃないか。あの機能って、読書という行為のフォーマットをくつがえすことであるわけだよ。

[中村] ぼくも最初は文章読んでたけど、読む価値がない気がしたんですよね。大事にされてる文章と大事にされてない文章があるのかな。

[鹿島田] コミケでBLの本を買って、ものすごい速さで読むひとがいるんですよ。それも、さっきめろんさんが言ってたみたいに、流れて「どこが濡れ場か」がわかるみたい。

[柴崎] 濡れ場を探すんですか？

[海猫沢] データベースがあるかないかで違うんだよ、ほんとに。ケータイ小説も同じですよ、たくさん改行があってすごいスピードで読んでいくんだけど、雰囲気はわかる、っていう。

[山崎] わたしはそれがわからない……。

[長嶋] でも、ナオコーラさんもBLのゲームやってたときには、データベースが発生しつつあったよな（笑）。

[海猫沢] やっぱり消費量の問題かな、どれだけやりこむかという。

[中村] じゃあ、そういうひとにはシナリオは必要なんですか。

[戸塚] ある程度は必要とされていると思いますね。導入部分がないと、キャラの違いが、ゲーム内部でもほかのゲームとの比較でも、わからないと思う。

[長嶋] AVでも、最初に女のひとにインタビューするじゃない？　そのあとで濡れ場がある。そのとき、インタビューを飛ばすひとと、見たいひとの2種類いますよね。

[戸塚] あ、近いかもしれない。「これからこんな女の子が脱ぎますよ」っていう。

[長嶋] でもゲームの場合は「こんな子が脱がされるんだ」って伝わるモノローグじゃなかったよね。

[中村] ゲームのは「男のモノローグ」だからね。AVにたとえると、インタビュアー自身のモノローグではじまるようなものじゃない？　ゲームだと、男の一人称に感情移入するために、モノローグを儀式的に読んでいる感じだと思う。

[山崎] 導入部分が島の話だったから、先入観で「島しか知らない男の子が文化を知るんだ」とか「3姉妹のひとりとくっついて、ほかのふたりが応援する」みたいな話だと思ってたんだけど……。

[長嶋] ぜんぜん、そういうビルドゥングスロマンではなかったよね。でも、だから物語がいらないのかというとそうでもない。エロが目当てならCGだけで安く売ってもいいはずなのに、それじゃ買わないよね。

[長嶋] 雑誌で紹介するときも、「なになにを舞台にした〇〇物語」みたいな設定を書くフォーマットができてるんですよね。「CG〜枚」というのはあくまで補助的データで、見出しにはならない。

[鹿島田] 「モノローグがないと感情移入できない」ってのは理解できる。「こんなほくでも、かわいい女の子と付き合える」って設定は必要だと思う。

[海猫沢] つくりものの世界でまで傷つきたくないんですよ。

[柴崎] ディ●ニーラ○ドでミ○キーにお説教されたらイヤだよね（笑）。

[海猫沢] ゲームはやるひとを肯定するんです。

[戸塚] その一方で、文章でみせる、大河ドラマ的なソフトもウケてますよ。熱狂的なファンは、2次創作もするくらい。

[鹿島田] 今日やったゲームは、女の登場人物が出てくるまでに時間がかりましたよね。モノローグでそこを埋めてるんだけど……そういうのって、ある意味、ロシア文学に似ている。『カラマーゾフの兄弟』とか。

[長嶋] ゾシマ長老がバストアップで出てきてな。

[中村] すごい飛躍（笑）。

[長嶋] 『カラマーゾフ』もCtrlキーで早送りできればな……。

[鹿島田] 大審問官まで早送り、みたいな。ロシア文学をものすごい数読んでデータベースあれば、それでもけっこう読めるんじゃない？　兄弟3人が揃うまで、ガーっと飛ばしちゃうの。

[山崎] 死んだところだけ、とか？

[鹿島田] そうすると、小説を書くひとがなぜそんな無駄な部分をつくっているのかという話になりますね。

[長嶋] 個人的には無駄と思ってないけどね。読みたいひとはじっくり読むこともできるから。

[海猫沢] 高いお金出して買うわけだから、テキスト飛ばしても最低1時間くらいプレイ時間がないといけないんですよ。そのくらいのテキスト量が必要。

[中村] 1本に文字の数ってどのくらい？

[長嶋] パッケージの裏に「何万字」って書いてあるゲームもあるよね。

[戸塚] 大ヒットした「Air」（2000年）も、1.5メガ強のテキスト容量が当時話題になりました。ぼくの知ってるなかでいちばんは多いのは4メガ強です。

[中村] 1キロバイトで2.5枚だから、×4000で……1万枚??

[長嶋] そのくらいあると、ぜんぶ読んで把握するひとには「読み応える物語だった」って感想になる。

[山崎] キロバイト単位で文字を換算するのが不思議……人間の「知りたい」って欲求が、ガンガン満たされる感じ。

[長嶋] AVだと、濡れ場の場面だけのクライマックス集ってあるじゃん？　それだけのゲームってある？

[鹿島田] 自分でクライマックスつくれるでしょう、アルバム機能があるから。

[柴崎] 「アルバム」っていう名前はいい表現ですね。

[中村] 主人公の思い出なんだよね。

[海猫沢] だからエロゲはやっぱ夏じゃないとダメなんですよ。「ひと夏の思い出」！

[中村] ふたつしか選択肢のない夏だったけど（笑）。

★

[長嶋] めろんさんと戸塚さんを誘ってよかったと思うのは、めろんさんがかつてシナリオを書いた「ぷに☆ぷこ〜」をプレイしてみたのもふくめて、エロゲーの世界からもいろんな才能が出てくるんだ、ってことがわかったことですね。

[中村] 日活ロマンポルノみたいな感じ？

[長嶋] そう。70年代にお金がないなかでやってきた監督が、いま活躍してるでしょう？　退屈なモノローグのなかにもおもしろいモノローグを書くひとはいて。もうちょっと経ったときに、評価が遅れて出るのかもね。

[戸塚] いまはまだ、「これはすばらしいものなんだ！」とまでは言えませんが、奈須きのことか、そういうひとたちが出てきたりしてますからね。

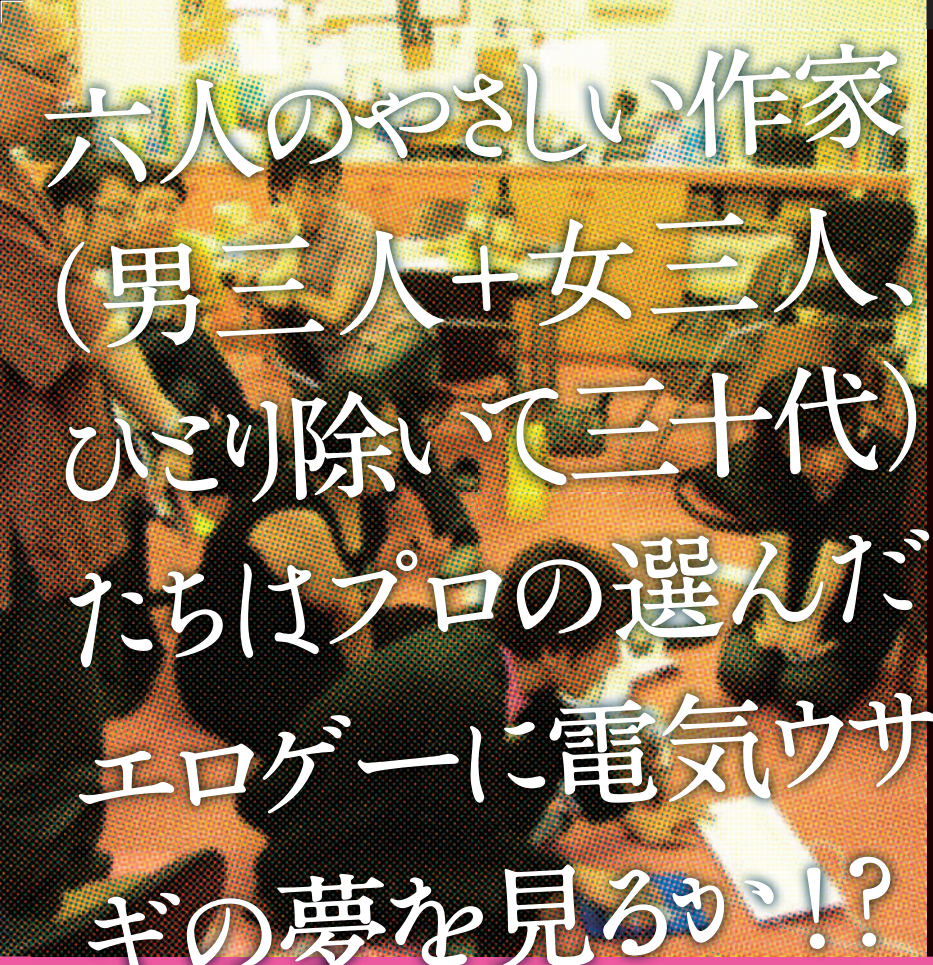
[海猫沢] 麻枝准、奈須きのこ、田中ロミオときていまはもう第3次期に入っているから個人的には、すでにある程度の評価が固まったあとって気がします。いまの若いオタクの多くは奈須さんリスペクトだし。

[長嶋] ここにいる全員より、奈須きのこの方が初版部数多いよ（笑）。たださ、日活ロマンポルノは「エロをやりつつ好きな表現を」って制約をかいくぐってる感じがあったでしょ。エロゲーの場合は、ひとりでつくれることもあるし、制約が映画ほど制約として機能しないんだよね。そういう鬱屈のなさが、いいところなのか悪いところなのか……。

[中村] 「本当はこれがやりたい」というより、「本当にこれがやりたい」みたいな感じ？

[鹿島田] 制約なんて関係なくて、本気でエロが好きなんですよね。

[海猫沢] エロに集約されてしまうと違う気がするんですが、確かにただただ好きという気持ちはみんな共通ですね。



六人のやさしい作家（男三人+女三人、ひとり除いて三十代）たちはプロの選んだエロゲーに電気ウサギの夢を見るか！？

◉鹿島田真希
3 ページ参照。

◉海猫沢めろん
8 ページ参照。

◉長嶋有
72 年生。02 年『猛スピードで母は』で芥川賞、07 年『夕子ちゃんの近道』大江健三郎賞を受賞。ゲーム批評などでブルボン小林、俳人・長嶋肩甲としても活躍中。

◉柴崎友香
73 年生。『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞。代表作に『ショートカット』『フルタイムライフ』など。

◉中村航
69 年生。04 年『ぐるぐるまわるすべり台』が野間文芸新人賞を受賞。絵本作品『星空放送局』やフジモトマサルとの共著『終わりは始まり』など。

◉山崎ナオコーラ
78 年生。04 年『人のセックスを笑うな』で文藝賞。最新作に『論理と感性は相反しない』。

◉戸塚伎一
71 年生。19 歳から漫画家・ライターとして PC 雑誌で活躍。著書に『ふり向けばセガがいる』ほか。http://www3.alpha-net.ne.jp/users/ugsg1/

愛のエロゲナイト・対戦篇

［長嶋］（タイトル画面の）右の女の子、好色そうな目だねえ。
［鹿島田］男はすぐそういうご都合主義的なこと言うよね。
［長嶋］だって、もともとそういう風に（絵が）チューニングされてるわけでしょう？
［鹿島田］たしかにかわいい絵だけどさ。
［柴崎］どれが長女だと思う？
［鹿島田］末っ子はまだ性のこと知らないと思うから、この顔（笑）。
［長嶋］まあ、とにかくやってみよう。
［戸塚］キーボードの Ctrl キーを押せば、文章をスキップして絵だけ見られます。
［長嶋］「既読スキップ」。これってエロゲー独特の文化だよね。
［柴崎］とにかくエロを、というひと向けなの？
［海猫沢］ワクワク（一同爆笑）。
［長嶋］エロゲーライターの友人に聞いたんだけど、原稿料は、キロバイト単位で発生するんだって。だから、文字数を稼ぐために主人公がやたらいろんなことを考える（笑）。ぼくが教えてる学校で男子学生にいきなり書かせた小説と一緒（笑）。モノローグばかりになるの。
［海猫沢］ちなみに 1 キロバイト 1000 円～ 6000 円までライターによってピンキリです。
［中村］1 文字 2 バイトだから 1000 バイトを 2 で割って、だいたい 400 字びっしり書いて 800 円ぐらいか。1 文字 2 円。
［海猫沢］「ユリイカ」とそんな変わんないんですね。
［長嶋］でも、原稿は改行もカウントされるけど、バイト単位だと改行や空白はカウントされないからね。

★

［一同］あ、きた、巨乳！
［海猫沢］この子はイイ！
［鹿島田］乳首がちょっと見えてる……わたしのわりと好きなかたちです（笑）。
［海猫沢］これ、あとで借りられないかな……。おれは子供のころから、ピンク色の髪の子に弱いんだよね。ミンキーモモとか。
［鹿島田］わたしも好きだった！　エロいんだよね。
［柴崎］エロ場面じゃないのに、さっそく「びしょ濡れで……」とか言ってますよー。
［海猫沢］こっちの女の子、ふつうのツンデレ？
［中村］ぼくはこの子がいちばんかわいいですね。
［鹿島田］髪の長い子が好き？
［中村］胸が自然だから。
［山崎］わたしも次女がいちばん好きです。
［柴崎］長嶋さんどれが好み？
［長嶋］記号的だから、誰でもいい（一同笑）。

★

［鹿島田］はじまってすぐ、「一緒に住む」みたいな展開になってるよ。誰から攻略しますか？
［長嶋］みんなにいちばん人気があったツンデレにしようよ。
［鹿島田］でも難しくない、ツンデレは？
［長嶋］じゃあ、鹿島田さんの好きなひとでいいよ。
［鹿島田］そろそろエロないといらいらしてくるよ。
［海猫沢］ヤバいな……エロゲ空間に吸い込まれて、ここに住んでるみたいな気になってきた。
［戸塚］むかしは友達の家に集まって、お父さんのコンピューターでやってましたよね。
［山崎］なんて主人公が島育ちっていう設定なの？
［鹿島田］この 3 人が同棲するための方便。
［海猫沢］ようするに同棲すればなんでもいいんですよ。
［鹿島田］じゃあ、ピンクの髪の子にする？
［海猫沢］こいつ……萌える！
［長嶋］まだエロシーン 1 回しか出てないのに、もうめろんさんが……。
［海猫沢］これはいい！
［中村］男が出てきた。これ誰？　自分？
［海猫沢］エロゲの主人公はだいたい顔がかくれていたり、半透明だったりするんですよ。
［長嶋］「半透明」っていう欲望のあらわれは、すごいと思う。女の子の体は見たいけど、男の身体性はいらないんだよね。だけど男だけが消えると、女の子ひとりでマヌケな格好をしてることになる。だから「半透明」。よくできてるよ。
［柴崎］もう恋愛してるんですか？
［戸塚］まだ女の子に受け入れられようとしてる状態ですね。

★

［長嶋］さっきも言ったけど 18、9 歳の男子の小説って、エロゲーみたいなセリフ書くよね。
［中村］どっちがどっちに似てるかわからないけど。しかしモノローグ長い……稼いでるね（笑）。
［鹿島田］この文章どう思いますか？　うまく書けてるのかな。
［海猫沢］小説とは違いますよ。エロゲは凝って書いてもじっくり読んでくれないから。
［鹿島田］わたし、BL（ボーイズラブ）小説書くときは、性描写で「桜色の突起を……」とか言い換えるんだけど、エロゲーは「乳首」とかも言い換えないんだね。喘ぎ声が長いのも、原稿料を稼ぐため？
［中村］喘ぎ声も音声あるの？「っ」ってどうやって発音するの？
［海猫沢］おれがつくったシナリオを読んでもらったときは、「ここをもうちょっとエロく……」とか声優さんに指示出しましたよ。
［中村］エロにとってモノローグはあんまり関係ないでしょう？　大事なのは、女のセリフなんじゃないかな。だって音声になるんだから。「うん」とか「っ」なんて、その 1 文字がすごい大切なんじゃないかな。
［長嶋］あ、「1 枚絵」だ。1 枚絵イベントは「アルバム」に残るの。
［戸塚］アルバムっていうのは、あとからそこだけ見返すためのモードですね。
［長嶋］クリアしても、アルバムがぜんぶ埋まるまでやるから、そこにゲーム性がある。
［柴崎］いま、女の子が転んで「あっ」って言ったら、いきなり下着に男性器が入るという状況に……。
［鹿島田］すごいムチャな……偶然ショーツをかいくぐって挿入なんて、ありえないご都合主義。彼女はエッチな気分になってないのに濡れてるわけ？
［柴崎］まだパンツのなかに入ってるだけです（笑）。
［中村］こういうの、プレイヤーは、見た瞬間に笑わないの？
［海猫沢］笑うわけないじゃない！　ドキドキする……こっちがおれの現実ですよ !!
［柴崎］前にめろんさん、街でかわいい女の子を見たときのことを「2 次元を超えた !」って。すごいいいセリフだなあと思った（笑）。
［鹿島田］（性器が）熱い熱いって言うけど、熱くなるもんなのかなあ。男性が熱いのは男根に血が通ってるからだけど、女性って、熱いとかそういう感じじゃないよね。
［柴崎］でも、ゲームやるひとを喜ばせるためには、男性側に伝わるようにこういう言い方になるんじゃない？
［長嶋］ゲームの表現は、男のプレイヤーにとってのリアルなんだよ！
（鹿島田、カーソルで局部をなぞる）
［中村］やめようよ、それ！　鹿島田さん !!
［長嶋］エロゲーのテキストって古い語彙が多いよね。
［柴崎］エッチ中も、絵は変わったり動いたりしないの？　基本的に、文章で想像するの？
［中村］声でしょう。
［長嶋］だから「女性のみフルボイス」ってウリなんだよ。
［海猫沢］いや、全体ですよ全体。オーラ。ゲームライターで、地の文に特徴があるひとって少ないですよね。
［鹿島田］同人誌とかエロゲーとかって、「くちゅくちゅ」とかの擬音を入れると効果的なの。文章としてわざと稚拙なものを入れておくんだよね。
［戸塚］最近の気の利いたゲームでは、そういう効果音が入ります。
［一同］気の利いたゲーム（爆笑）！

★

［山崎］この子たちは何歳なんですか？
［戸塚］いちおう 18 歳以上なんです。舞台は高校に見えても、必ず「○○学園」なんですよ。「学校」ではない、ってことになってます。
［海猫沢］だからいま児童ポルノ法で、「キャラの見た目で決めよう」とかって話になるんですよ。
［山崎］登場人物って、どうやって生活してることになってるんですか？
［戸塚］だいたい、キャラの家はめぐまれています。
［長嶋］だって、すごく高いよ、このバスルーム！
［海猫沢］両親は海外に行って、とか。
［長嶋］それはエロに限らず、ラブコメ「同棲もの」の基本だよね。
［鹿島田］あだち充系？
［戸塚］「みゆき」とか。
［海猫沢］あ、男子だ……飛ばそう。
［鹿島田］でも 3P とかになるかもしれないじゃん！
［山崎］ライバルが出てくる展開はけっこうあるの？
［戸塚］よくあるのは、主人公の幼馴染。
［柴崎］あ、鹿島田さん、「メガネ」に「巨乳」だよ！
［鹿島田］「萌え～」！　わたしこの娘好き。S とか M とか属性がはっきりしてる娘がいい！　頭のリボンだって猫耳だよ絶対！
［柴崎］ほんとだ、リボンがぴくって動いた。
（山崎・中村、呆然）
［海猫沢］みんなの反応があまりに新鮮すぎる……こんなの典型的なデータベース的キャラじゃないすか。登場人物の属性がそういう部分か、あとは会話であらわされるんですよ。
［長嶋］会話や表情だけじゃない性格描写も知ってほしいな、こういうゲームをするひとには。背景に「バストアップ」の人物を描いてテキストが下段にあるのって、よくいえば人形浄瑠璃みたいなもんでしょ？　太夫がいて声をやってて、浄瑠璃がバストアップの絵を動かしてるって。それで表現できることもあるんだけど、それ以外の感情表現も欲してほしい。
［戸塚］あとは、登場人物の性格描写は描写じゃなくてポーズとかであらわされるんですよ。たとえば、手を前に組んでる子は警戒してる、とか。あとは会話ですね。
［山崎］勉強になります。

★

［鹿島田］このゲーム、選択肢出てこないね。
［海猫沢］ある意味現実に近づいてる。
［戸塚］どこに射精するか、とかいうのがありますよ。
［長嶋］中出しかどうかだけは律義に選択させてくれるね（笑）。精子の「量」を選べるのあるよね。フォトショ（Photoshop）でレイヤー増やせばいいだけだから。
［鹿島田］男のひとがプレイすると「中出しするか」が気になるのっておもしろいよね。女はいかに気持ちいいかじゃない？
［柴崎］気持ちよさを、ゲームで表現するのは難しいよね。
［長嶋］やっぱり男目線だよね。「出すかどうか」を選べるのは男だけなわけだから。
［海猫沢］あ、きた！　選択肢きた！　あ、セーブできるらしいよ！
［柴崎］セーブしましょう、セーブ！
［戸塚］3 人全員がお弁当つくってきました。誰のを食べるか選べます。
［鹿島田］男の夢だよね。
［長嶋］こんな夢見たことないけどね。
［中村］あ、メガネがきた。
［鹿島田］モエー！
［柴崎］あれが好き？
［鹿島田］好き。「メガネっ娘」好きだから。まじめっぽい娘がエッチなことしてるときどきしない？
［海猫沢］わかるけど……みなさんの感性は 10 年ズレてる……ギャップでしょ？
［中村］（携帯電話の画像を見せながら）鹿島田さん、おれに萌えてもいいですよ。
［鹿島田］あ、ガクランだ！　かっこいい航さん！　転送して転送して！
［中村］今日とった写真です。
［鹿島田］あ、これエプロン萌えだね。これ選択肢出てきたっけ？
［柴崎］アイスクリーム屋さんに移動したよ。
［海猫沢］おれはこの先の展開が読めましたよ。
［長嶋］アイスは使うよね（笑）。
［海猫沢］お菓子作りといえばなんらかの白濁液で決まり。
［鹿島田］すべりもよくなるし……これは決まりですね。
［海猫沢］あれ、白濁液がかかりませんね。
［中村］ミルクのこと白濁液って言わないでしょう（笑）。
［鹿島田］そういうものはぜんぶ白濁液なんですよ。

★

［長嶋］最近のエロゲーの女の子は処女じゃなきゃいけないんだよね。
［戸塚］「人妻もの」じゃなければ大抵そうです。
［長嶋］購買者のニーズに応えてる。
［戸塚］なんだかんだいって潔癖なところがあるんですよ。
［海猫沢］基本的にエロゲは商品だし、所有欲を満たすものだから、「使用済み」だとイヤじゃないですか。
［長嶋］1 万円近く払って、ひとの「使用済み」はイヤだ、と。
［柴崎］まあ、そのためにある商品だからねえ……。
［鹿島田］たちの悪いのは、そういう所有欲に無自覚な男だよね。
［山崎］さっきまで萌えてたのに、鹿島田さん急にいいこと言いますね。でもそれはそうだ。
［鹿島田］「おれはフェミニンだ」って思ってる男より、

知らなかった死の姿が、今、紫の野辺となって、ぼくは泣きながら東京市歌の一番を歌い終わりました。

二番と三番は、今の東京を讃える歌詞です。「千代田の宮居はわれらがほこり」という歌詞も入っています。ぼくは、とてもそこまで歌う気持ちにはなれませんでした。ぼくもまた非国民だったのです。

助け船のようなおばあちゃんの声がしました。

「今度は、坊やの番だよ」

脱脂綿をコップに戻し、おばあちゃんはコップを差し出しました。割り箸がペンのようにコップから突き出ています。

ペンを握るように、ぼくは割り箸を握りました。手紙を書くように、ぼくはおじいちゃんの唇の上で脱脂綿のペン先を動かしました。

「もーいーよー」と、おばあちゃんは隠れんぼをするように言いました。割り箸と脱脂綿を、ぼくはコップの中に戻しました。

死に水をとるのは終わりです。でも、それは隠れんぼの始まりでした。鬼にされたぼくは、生の陰に隠れている死というものに反応しながら、おろおろと生きてこなければなりませんでした。

「おばあちゃん、警察に行ってくるから、お留守番していてね」

「警察？」と、ぼくは驚いて言いました。おばあちゃんは、おじいちゃんとぼくという二人の非国民のことを警察に知らせに行くのでしょうか？

「おじいちゃん、お医者さんには、絶対、診てもらわない人だったでしょう。だから、シボーシンダンショを書いてもらえないんだよ。それがなかったらシボートドケが出せないし、出せなかったらカソーキョカショーがもらえないんだよ。それがもらえなかったら、おじいちゃんは、このまま、ここに置いとかなきゃなんないんだよ」

シボーシンダンショ、シボートドケ、カソーキョカショー？　わけの分からぬあれやこれやが、おばあちゃんをぐるぐる巻きにしているのです。

ぐるぐる巻きにされたおばあちゃんは、真っ赤な顔をして警察へ出かけていきました。

おじいちゃんの顔は、白いタオルで覆われていました。おばあちゃんが掛けていったのです。笑いでいっぱいの死に顔が隠され、ぼくは、やはり、隠れんぼの鬼なのでした。

鬼は、忍び寄らなければなりません。忍び寄るのは、裏側からの方がいいでしょう。

ぼくは頭の横で畳をこすり、敷布団の下を覗きました。茶色い紙の端が見えます。引き出すと、それは一冊の本でした。

くたびれた小包の紙が表紙代わりにかぶさっています。和綴じの作法で、くすんだ麻紐が本を綴じていました。何カ所も何カ所も、縛りつけるようなしつこい綴じ方です。縛りつけられた悪党を、ぼくは見つけてしまったのかもしれません。

本をめくると、現われたのはやはり悪党でした。どぎつい色で彩られた悪党は、髷を結った一組の男女でした。裾をはだけ、二人はもつれ合っています。

おちんちんの太さと長さに、ぼくは息を呑みました。ぼくはおかあちゃんやおばあちゃんに連れられて銭湯に行き、女風呂に入り続けてきました。大人のおちんちんはあんまり見たことがないのですが、お酒に酔っぱらったおじいちゃんが、玄関の障子を開けて、たたきに向かっておしっこをするのは何度も見ました。その大きさの何倍もあるおちんちんが、ろくろ首のように、女のまたぐらへ伸びているのです。

女風呂に慣れているとは言え、またぐらを覗かせてもらったことなど一度もありません。そして、今、目の前にある本の中のまたぐらは、まるで桜餅の化け物のような色と形を見せ、おいでおいでをしているのです。葉の色はありません。葉を剝いて食べるのが、ぼくの食べ方でした。絵の中の男も、葉は嫌いなのかもしれません。戦争のおかげで、食べたくても食べられない桜餅――せっかくの桜餅なのに、ぼくは剝き出しの化け物に吐き気を感じていました。

追い払うようにページをめくると、次のページにも男と女は現われます。今度はろくろ首おちんちんが、桜餅の化け物に食いつかれてしまっているではありませんか。ぼくはあわてて本を閉じ、おじいちゃんの布団の下に戻しました。

おじいちゃん、生きるって、何なのでしょう？　死ぬって、何なのでしょう？

日付も署名も宛名もない手紙は、封筒を膨らませ、ジャンパーのポケットに入っていた。

封筒の郵便番号の枠の中は空白だった。切手も貼っていなかった。この世の決まりごとを捨ててしまった老人なのだ。

受取人の住所氏名も、差出人の住所氏名も書かれていない封筒である。住所も氏名もこの世の決まりごとなのだから、書かれていないのは当然である。

記憶のモザイクの通りを当てもなく歩き出す。ポストという当ては、もうどうでもよかった。ポストもまた、この世の決まりごとの一つなのだから。

足かせが外れたように足がはずむ。顔の筋肉がゆるみ、笑い声が飛び出してくる。

「わっはっはっはっはっはっ！」

一冊　百円

店頭に積まれた本の上にダンボールの札が立ち、マジックの文字が見えた。

これは神田の古本屋か？　それとも早稲田の古本屋か？

どこでもいい。神田も早稲田も、この世の決まりごとに過ぎないのだから――。

「わっはっはっはっはっはっ！」

ダンボールの札のすぐそばには、無愛想な表紙を目立たせ一冊の本がある。昔なつかしい小包の紙だ。くすんだ麻紐が和綴じの作法を無骨に演じている。あの日、一度だけ開いて見たものだ。

なつかしや、あらなつかしや、なつかしや。

「わっはっはっはっはっはっ！」

近づいて手に取った。表紙をめくる。最初のページには、何も摺られていない。次のページも同じだった。めくってもめくっても、あの日の男女は現われてくれない。黄ばんだ和紙の無数の繊維が、時間のようなたなびきを見せるだけだ。たなびきの彼方に、全ては消えていったのである。

春画が何だ！　浮世絵が何だ！　歌麿が何だ！　源氏物語も法隆寺も、みんなみんな消えてしまえ！　消えることこそ真理なのだ！

「わっはっはっはっはっはっ！」

抜け殻となった本を足元に叩きつける。

「痛い！」「痛い！」「痛い！」「痛い！」「痛い！」「痛い！」「痛い！」

隅田川の花火のように声が響き、髷を結った何組もの男女が裾をはだけ、尻餅を突いていた。どっこい性愛は、消えないことこそ真理だったのだ。

描かれた男根よりも、目の前の男根はみすぼらしかった。桜餅のお化けのようだった女陰は、よじれによじれてくすんでいる。

眉根に皺を寄せ、ペアたちは叩きつけられた痛みに耐えていた。力みの入ったその顔は、性愛だけなわの春画の顔と、どこか似通っている。違っているのは、春画には一本の皺も描かれていないということだった。それは、春画に限られたことではないだろう。「オギャー」と生まれるその瞬間、人は既に眉根に皺を寄せて登場するというのに、「希望」だとか「明日」だとかという画筆で皺を消し、人は装っていくのである。

「わっはっはっはっはっはっ！」

「御用だ！」という声がした。

立ち上がった男が一人、萎えた男根をぶら下げながら十手を向けている。眉根の皺は、どうしようもない深さだった。

「わっはっはっはっはっはっ！」

癌細胞の暴れる腹を両手で押さえ、笑ってやる。笑うという行為だけが、眉根の皺を真に消し去ることができるのだ。

向井豊昭 ◉ Mukai Toyoaki

33年生。96年、62歳にして「BARABARA」で早稲田文学新人賞を受賞、奇妙な文体とシュールな物語、真摯な問題意識のアンバランスが注目を集めた。みずから設立した「BARABARA書房」から定価0円（＋税）のゲリラ本をつぎつぎ刊行、07年10月から刊行された手書き＋コピーの個人誌「Mortos」は、計4冊を数えている。

いつものいびきの方が大変だったのです。

いびきもかかず、おじいちゃんは夜通しうなっていましたよね。それは死を迎えるおじいちゃんの言葉だったのだということが、その時のぼくには分かりませんでした。

おじいちゃん、ごめんなさい。ぼくは、おばあちゃんのおっぱいをいじりながら、おじいちゃんのうめき声を追い払い、縁側に面した八畳間の布団で眠っていたのです。

おじいちゃんの部屋は、玄関に面した四畳半でしたよね。おじいちゃんは眠る時、そこで一人でした。

二つの部屋の間には仏壇が置かれた六畳間があり、仏壇には、戦死したおとうちゃんの写真と、結核で死んだお母ちゃんの写真が飾られていましたよね。

「洗面器！」

言葉を縮め、おじいちゃんの声がまた轟きました。顔を洗うなら水が入ったまま持っていけばいいのでしょう。洗ったのか、まだなのか？　何のための洗面器なのか？　ぼくは洗面器の水を捨てるべきか否か迷っていたのです。

おばあちゃんは、洗濯のため外に出ていました。愚図愚図していては、おじいちゃんにまた叫ばれてしまうことでしょう。水を捨てる時間は、切り捨てられなければなりませんでした。

おじいちゃんの部屋のふすまは、閉められていました。洗面器の水が揺れ、立ち止まった足を濡らします。

濡れた足をふすまの隙間に突っ込み、ハリケーンのようにふすまを開けました。おじいちゃんと抵抗するためには、ハリケーンでなければなりません。おじいちゃんに連れられて見にいった「ハリケーン」という洋画の、すさまじい嵐の場面は、ずっとずっと、今、この歳になっても心に刻まれていますよ。

そこに出てくる男と女のことは、子どもだったぼくには何も分かりませんでした。分からなくてもいいんですよね。人と人との姿は、自然の姿と同じなのですから。

上半身を起こしたおじいちゃんの目は、助けを求めて光っていました。眉間の皺が言葉のように寄っています。吐き気をこらえて結んでいる唇は、断末魔の鼠のように痙攣していました。

差し出された洗面器に、おじいちゃんは嫌を突き出します。喉を揺るがす音と一緒に、血が噴き出しました。黒ずんだ血でした。

墨流しの墨のように、たおやかな動きは見せてくれません。洗面器の水の面にいびつな円を叩きつけると、そのまま底に沈んでいくのでした。

「何だ、くんてこりんな日の丸だな」と、おじいちゃんは言いました。

「わっはっはっはっはっはっ！」

笑い声が響きます。おじいちゃんの眉根の皺は消えていました。

大日本帝国の国旗にこじつけて笑うなんて、それは非国民のすることです。

洗面器を持ったぼくの両手が震えました。

布団のわきに洗面器を置くと、ぼくは下駄を突っかけ、長屋の路地を走っていきました。

手押し井戸があります。洗濯板の上で手を動かしているおばあちゃんの姿が見えます。

声が出てきません。ぼくは井戸に近づくと、おばあちゃんに並んでしゃがみました。

おばあちゃんは手を休めません。しゃぼんが泡立ち、はじけていきます。おばあちゃんの耳元で、ぼくはようやく、しゃぼんの泡のような声をはじかせました。それは、ぼくが本当に言いたいことと、かなりのズレがありました。

「おじいちゃん、血、吐いた」

ズレはあるのに、言葉はほとほとに役に立ちます。ほとほとを証明するように、おばあちゃんは、ぼくより短い言葉を返してきました。

「またかい」

ぼくが学校に行っている時も血を吐いていたのだということを、ぼくは後になって知りました。

「よいしょ」

掛け声をかけ、おばあちゃんは、たらいを手押しポンプから離し、洗い場の隅に移しました。

「よいしょ」

おばあちゃんはまた掛け声をかけ、腰を伸ばします。下駄が音をたて、おばあちゃんは前のめりになって走り出しました。おばあちゃんが走る姿を見たのは、後にも先にも、その日だけのことでした。

次の日は、学校でした。やり損ねた墨流しを今日こそやろうと、ぼくは急ぎ足で帰ってきました。

玄関のガラス戸を開け、「ただ今！」と言った途端、障子越しに漂ってくる匂いが鼻の粘膜をなでました。おやつのような甘い匂いなのです。

おかあちゃんが死んだ時、ぼくは同じ匂いを感じたことがあります。それは、もうおやつをくれられなくなるおかあちゃんの最後の思いだったのかもしれません。

おじいちゃんは、おやつなんかくれたことがありませんでしたよね。逆に、ぼくがおかあちゃんや、おばあちゃんにもらったおやつを食べていると、「うまそうだな。半分わけしよう」と言って、大きな手を伸ばしてきましたよね。

おじいちゃんには、お金がなかったからケチだったんだということに気づいたのは、ぼくが大人になってからです。

おじいちゃんは小説家になるんだと言って勤め先の北海道庁を辞め、家族を連れて東京へ出てきたんですよね。

おじいちゃんの原稿は相手にされず、おばあちゃんは着物の仕立て、家政婦、病院の付添婦など、いろんな仕事をしてお金を稼いだんですよね。

おじいちゃん。おじいちゃんの部屋から漂ってきた甘い匂いは、ぼくくれたおやつだったのだと思うことにします。映画の「ハリケーン」は甘くはなかったけど、あれもおじいちゃんのおやつでした。

障子を開けると、おじいちゃんの枕元には、青ざめた顔のおばあちゃんが座っていました。

眉根には皺が寄せられています。

目を閉じたおじいちゃんの顔は、もっと青ざめていました。でも、眉根の皺はありません。おじいちゃんの顔は笑っているのです。笑い声は発しませんが、笑いを届けるように、口は大きく開いていました。

おばあちゃんの膝の先には、空のコップがありました。

「おじいちゃん、死んじゃったよ」と、おばあちゃんは、コップを見つめながら言いました。

「配給のお酒注いで、置いてったんだよ。たった今、外から帰ってきてさ、おじいちゃんを覗いたら、ウンともスンとも言わないんだよね。コップのお酒だけは空っぽにして、死んじゃったんだよ」

おばあちゃんは、コップを持ち上げました。「あら、いやだ。少し残ってるじゃない」

コップを置いて四畳半を出ると、おばあちゃんはすぐに戻ってきました。手には、新しい割り箸と、小さくむしられた脱脂綿を持っています。

コップの中に、おばあちゃんは脱脂綿を落としました。今度は割り箸を二つに裂きます。たわいのない音をたてて、割り箸は裂けました。人が死ぬということもまた、何とたわいないことなのでしょう。

ぼくは両手で耳を塞ぎ、固く目をつぶりました。

おばあちゃんの体が寄ってくる気配がします。両手がつかまれ、耳から引き離されました。

「おじいちゃんを天国に送ってあげようね。目を開けなさい」

おそるおそる目を開くと、おばあちゃんはコップの底のお酒で濡れた脱脂綿を割り箸でつまみ上げ、おじいちゃんの唇の上に持っていきました。

割り箸を握った手が、揺り籠のように揺れます。脱脂綿が掌のように紫色の唇をなで、紫は武蔵の野辺のように光りました。

紫においし武蔵の野辺に
日本の文化の華さきみだれ
月影いるべき山の端もなく
むかしの広野のおもかげいずこ

小さな声で、ぼくは東京市歌の一番を歌い出していました。学校で、式のたびに歌わされる歌です。意味はよく分かりません。でも、行進曲風の堂々とした曲の底にある哀しみのようなものを、ぼくは突然分かったような気がしたのです。

おとうちゃんが死んだ時、戦友は、どうやって天国に送ってあげたのか――遠い遠い海の向こうのことなので、ぼくは何も知りません。

おかあちゃんが死んだ時、おじいちゃんと、おばあちゃんは、どうやって天国に送ってあげたのか――夜中だったので、寝ぼけたぼくは何も知りません。

WASEDA bungaku FreePaper
vol.013_2008_summer
わからん?! 文学
Wonderful BUNGAKU

向井豊昭／戸塚伎一／山崎ナオコーラ／中村航／柴崎友香／長嶋有／四方田犬彦／大久秀憲／山本動物／斎藤美奈子／村田沙耶香→岡本かの子／生田武志／南陀楼綾繁＋内澤旬子／池田雄一／中森明夫／海猫沢めろん／上野昂志／大杉重男／福永信＋名久井直子／nanakikae／鹿島田真希

¥0

MUKAI TOYOAKI

わたしの向井豊昭

両手で腹を押さえ、前のめりに歩いていく。

手は、爪の先まで黄ばんでいた。眉根に皺を集めて、顔も黄ばんでいる。

吐き気が胸に突き上がる。癌細胞が暴れているのだ。

四つ角を左に曲がる。ポストは、すぐ目の先にあるはずだった。

曲がったのだがポストは見えない。ポストを前にした米屋の建物も、看板も代わっていた。

「三崎薬局？」

薬というレトロな文字が使われている。横書きの看板は右から始まっていた。

思い出がよみがえり、後ずさりをする。三崎薬局の詰め襟の中学生は、子どものころの恐怖だったのだ。

目が合うと、なぜか追いかけてくる。そこに何人子どもがいても、追いかけられるのはこちら一人だった。

理不尽なことである。この世そのものが理不尽の塊――不意に何かに追いかけられるのだぞ、ということを教えてくれた親切なオニイサンだったのかもしれない。

そう言えば、取っ捕まったことは一度もなかった。息を切らして振り返ると、いつの間にか姿は消えていたのだ。

薬局の隣に目をやる。

「青森銀行川内支店」という身の丈ほどの立て看板が立っていた。東京は大井の三崎薬局に、北の町の銀行が並んでいるのだ。

戦争中、祖母の故郷に疎開をし、その町で小・中・高を卒業した。高校は定時制だった。

学校の帰り、灯の消えた商店街をしょぼくれた姿で歩いてくると、ピンポー学生を嘲笑うような嬌声が灯に乗って流れてくる店があった。銀行の向かいの菊乃家という小料理屋だった。

友達数人で、銀行の立て看板を菊乃家の前に移動してしまったことがある。翌朝、勤め先の営林署に向かうため通りを歩いていくと、立て看板は何事もなかったように定位置に戻っていた。ほっとしながら、いつもの一日が始まったのである。

いつもは、どこに行ったのだろう？

商店街の一軒一軒に目を注ぐ。

菊乃家は、駄菓子屋になっていた。看板はないが、そのたたずまいは昭和軒である。北海道は――二軒しかなかった店の、看板を持たない方の店だった。かつて暮らした土地の店という店が、配列を変えた突然変異の遺伝子のように並んでいるのである。

吐き気が強まり、黄ばんだ手は胸を押さえた。生暖かいものが突き上がってくる。口をこじ開け、黒ずんだ道路の上に影のように撒かれたものがあった。

唇に残る影の残覚を手で拭う。黒ずんだ血が指に添って走っていった。

「おじいちゃん」と、血に向かって呼びかける。六十年以上も昔、おじいちゃんは、同じ色の血を目の前で吐いたのだ。

日曜日の朝でしたよね。

「洗面器持ってこい！」

おじいちゃんが叫んだ時、ぼくは水をたたえた洗面器を縁側に置き、そのかたわらで墨を磨っていました。前の日、友達のところで覚えてきた墨流しをやろうとしていたのです。

一週間くらい前から、おじいちゃんはおなかが痛いと言って寝込んでしまい、おばあちゃんがお医者さんを呼ぼうとすると、「医者は嫌いだ」と言って顔を赤くして怒りましたよね。

「ウーン、ウーン」

おじいちゃんは昼も夜も、うなり声を発して痛みをこらえていましたよね。でも、ぼくは、うなり声はあまり気になりませんでした。